

年齢階級別、薬効分類別ジェネリック医薬品使用割合について 【概要版】

国民健康保険・協会けんぽ分析結果

1. 目的

国では、ジェネリック医薬品使用割合を2020年9月までに80%以上にすることを目標に掲げており、本県の使用割合は徐々に上昇傾向にあるが、全国的にみるとまだまだ低迷している状況であります。

ジェネリック医薬品使用割合（年代別等）に関する状況を把握し、今後の事業の検討材料にするため、国民健康保険と協会けんぽのデータを統合した分析資料を作成しました。

2. 集計対象

・国民健康保険と協会けんぽの内科、DPC、歯科、調剤レセプトについて集計（電子レセプトに限る、再審査分を除く）

・令和元年10月診療分（11月審査分）レセプトを使用

3. 算出方法

・[後発医薬品の数量] / ([後発医薬品のある先発医薬品の数量] + [後発医薬品の数量]) で算出

・項目の「対象薬剤数」とは[後発医薬品のある先発医薬品の数量] + [後発医薬品の数量]

・「数量」は、薬価基準告示上の規格単位ごとに数えたものをいう

4. 統計分析

(1) 薬効分類別の使用割合

【0歳から74歳において使用割合が高い・低い薬剤名及び使用割合】

使用割合が高い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合	使用割合が低い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合
ビタミン剤 (594,635÷679,799)	87.50%	放射性医薬品 (167÷1,892)	8.80%
歯科口腔用薬 (456÷536)	85.10%	人工透析薬 (441÷1,714)	25.70%
滋養強壮剤 (109,753÷131,288)	83.60%	アルカロイド系麻薬(天然麻薬) (2,067÷6,114)	33.80%

①使用割合の状況

- ・使用割合が高い薬剤は、ビタミン剤、歯科口腔用薬、滋養強壮剤という状況でした。
- ・使用割合が低い薬剤は、放射線医薬品、人工透析薬、アルカロイド系麻薬(天然麻薬)という状況でした。

②被保険者からみた使用割合に差異がある要因

- ・被保険者が市販薬として、広く認知されているものについては使用割合が高い傾向にあると考えられます。
- ・使用割合が低い薬剤については市販薬として目に触れることが少ないことから、後発医薬品に変更することに対して、抵抗があると考えられます。

(2) 年齢階級別の使用割合

年齢階級	0歳～4歳	5歳～9歳	10歳～14歳	15歳～19歳	20歳～24歳	25歳～29歳	30歳～34歳	35歳～39歳
年齢階級別 使用割合比較(%)	67.0	60.1	61.4	67.2	73.6	73.3	71.8	72.4
年齢階級	40歳～44歳	45歳～49歳	50歳～54歳	55歳～59歳	60歳～64歳	65歳～69歳	70歳～74歳	
年齢階級別 使用割合比較(%)	70.8	73.6	73.6	73.5	75.6	74.6	73.4	

①使用割合の状況

- ・0歳から19歳までの若年層の使用割合が低い（70%を下回る）状況でした。
- ・高齢者においては使用割合が高く、その中で最も高い年齢階級が60歳から64歳（使用割合75.6%）でした。

②使用割合の低い要因

- ・0歳から19歳の使用割合が低い状況は、県内で多くの市町村において義務教育終了まで窓口無料化が実施されていることから自己負担額に対するコスト意識が薄いことが要因の1つと考えられる。

(3) 若年層における薬効分類別の使用割合

【0歳から4歳薬効分類別の使用割合状況】

使用割合が高い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合	使用割合が低い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合
滋養強壮剤 (2,793÷2,793)	100.00%	非アルカロイド系麻薬 (10÷78)	12.70%
ビタミン剤 (46÷49)	94.80%	ホルモン剤【抗ホルモン剤を含む】 (258÷702)	36.70%
診断用薬 【体外診断用医薬品を除く】 (24÷26)	92.30%	泌尿器生殖器官及び肛門用薬 (62÷148)	41.90%

【10歳から14歳薬効分類別の使用割合状況】

使用割合が高い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合	使用割合が低い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合
歯科口腔用薬 (2÷2)	100.00%	放射性医薬品 (0÷111)	0.00%
滋養強壮剤 (1,375÷1,407)	97.70%	その他の代謝性医薬品 (525÷6,088)	8.70%
ビタミン剤 (4,037÷4,202)	96.10%	ホルモン剤【抗ホルモン剤を含む】 (327÷776)	42.10%

①使用割合の状況

- ・若年層での使用割合が低い薬剤については、非アルカロイド系麻薬、ホルモン剤【抗ホルモン剤を含む】その他の代謝性医薬品、放射性医薬品、泌尿器生殖器官及び肛門薬、外皮用薬、抗生物質製剤という結果になりました。

【5歳から9歳薬効分類別の使用割合状況】

使用割合が高い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合	使用割合が低い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合
歯科口腔用薬 (4÷4)	100.00%	ホルモン剤【抗ホルモン剤を含む】 (65÷370)	17.70%
診断用薬 【体外診断用医薬品を除く】 (47÷47)	100.00%	非アルカロイド系麻薬 (9÷45)	20.00%
ビタミン剤 (608÷609)	99.80%	その他の代謝性医薬品 (1,818÷6,495)	28.00%

【15歳から19歳薬効分類別の使用割合状況】

使用割合が高い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合	使用割合が低い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合
歯科口腔用薬 (9÷9)	100.00%	外皮用薬 (20,582÷43,842)	46.90%
ビタミン剤 (9,393÷10,222)	91.90%	その他の代謝性医薬品 (3,228÷6,311)	51.10%
消化器官用薬 (33,482÷38,293)	87.40%	抗生物質製剤 (11,635÷20,275)	57.40%

5. まとめ

- ・今回の統計結果から、本県では改めて若年層の使用割合が低いことが明らかになりました。このことを踏まえ、保険者協議会としても県、医師会、歯科医師会、薬剤師会などの関係機関との連携した取り組みに加え、教育機関等の協力も得て、保護者の方々にジェネリック医薬品が安心・安全な薬剤であることや医療費の抑制につながることを周知していく必要があると考えます。

年齢階級別、薬効分類別ジェネリック
医薬品使用割合について

～国民健康保険・協会けんぽ分析結果～

山梨県保険者協議会

目 次

1.	目的	1
2.	集計対象	1
3.	算出方法	1
4.	統計分析	
	（1）薬効分類別の使用割合	2
	（2）年齢階級別の使用割合	5
	（3）若年層における薬効分類別の使用割合	20
5.	まとめ	32

■年齢階級別、薬効分類別ジェネリック医薬品使用割合
～データ分析(数量ベース、令和元年10月診療分)～

1. 目的

国では、医療費の抑制や患者の負担軽減につながるため、ジェネリック医薬品使用割合を2020年9月までに80%以上にすることを目標に掲げています。

本県の使用割合については徐々に上昇傾向にあります。また、全国的にみると低迷している状況であります。

このようなことから、本協議会では令和元年度事業としてジェネリック医薬品使用割合(年代別等)に関する状況を把握し今後の事業についての検討材料とするため、協会けんぽと国保のデータを統合した分析資料を作成しました。

2. 集計対象

○協会けんぽ(一般分)、国保(一般分、退職分)の医科、DPC、歯科、調剤レセプトについて集計したものである。(ただし、電子レセプトに限る。)

○DPCレセプトについては、直接の診療報酬請求の対象としていないコーディングデータを集計対象としている。

○再審査分を除くレセプトを集計対象としている。

○令和1年10月診療分(11月審査分)レセプトを使用

○今回の統計資料作成において、協会けんぽ、国保ともに処方がない薬剤については対象外としております。

19. その他の神経系及び感覚器用医薬品、41. 細胞賦活用薬、

49. その他の組織細胞機能用医薬品、51. 生薬、52. 漢方製剤、

59. その他の生薬及び漢方処方に基づく医薬品、63. 生物学的製剤、

64. 寄生動物用薬、69. その他の病原生物に対する医薬品、71. 調剤用薬、

73. 公衆衛生用薬、74. 体外診断用医薬品

3. 算出方法

○
$$\frac{[\text{後発医薬品の数量}]}{([\text{後発医薬品のある先発医薬品の数量}] + [\text{後発医薬品の数量}]}$$
で算出している。なお、項目の「対象薬剤数」とは
$$[\text{後発医薬品のある先発医薬品の数量}] + [\text{後発医薬品の数量}]$$

「切替薬剤数」とは
$$[\text{後発医薬品の数量}]$$
の事を示します。

○「数量」は、薬価基準告示上の規格単位ごとに数えたものをいう。

○薬効分類は37薬剤に分類、「日本標準商品分類」の「中分類87-医薬品及び関連製品」に準拠して設定している。

○年齢階級は5歳刻み、年齢は実際の診療年月末日時点で判別している。

4. 統計結果 (1)薬効分類別の使用割合

(資料No.1-1.1-2)

○《使用割合の状況》

全年齢階級を対象に薬効分類別で見ると、使用割合が低い薬剤は放射線医薬品 8.8%、人工透析薬 25.7%、アルカロイド系麻薬(天然麻薬)33.8%という状況でした。また、使用割合が高い薬剤はビタミン剤 87.5%、歯科口腔用薬 85.1%、滋養強壮剤 83.6%、という状況でした。

【0歳から74歳において使用割合が高い・低い薬剤名及び使用割合】

使用割合が高い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合	使用割合が低い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合
ビタミン剤 (594,635÷679,799)	87.5%	放射性医薬品 (167÷1,892)	8.8%
歯科口腔用薬 (456÷536)	85.1%	人工透析薬 (441÷1,714)	25.7%
滋養強壮剤 (109,753÷131,288)	83.6%	アルカロイド系麻薬(天然麻薬) (2,067÷6,114)	33.8%

※歯科口腔用薬 (歯科用局所麻酔剤、歯科用抗生物質製剤等)

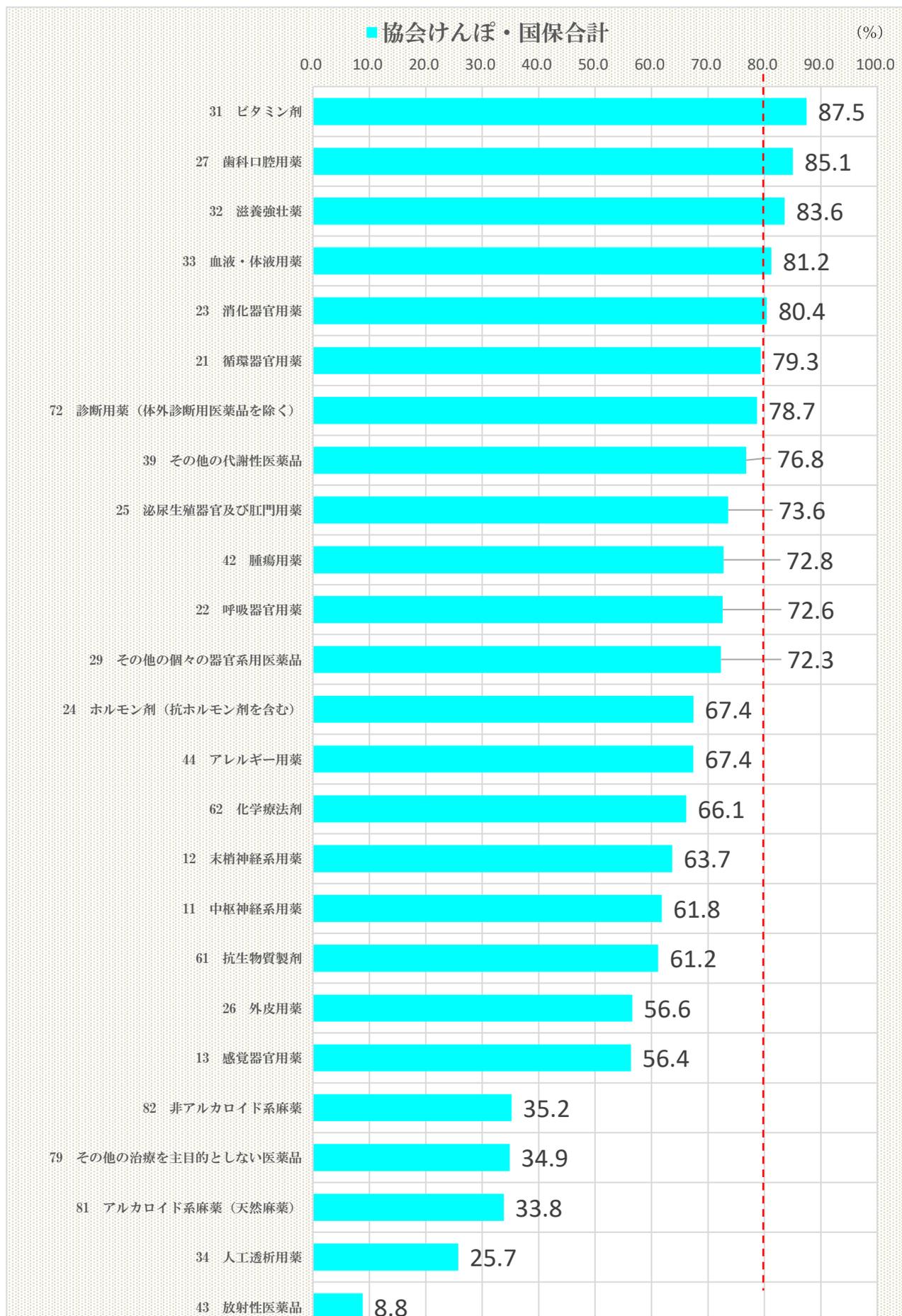
※滋養強壮剤 (カルシウム剤、糖類剤等)

○《被保険者からみた場合の使用割合に差異がある要因》

※被保険者が市販薬として、広く認知されているものについては使用割合が高い傾向にあるが、使用割合が低い薬剤については市販薬として目に触れることが少ないことから、後発医薬品に変更することに対して、抵抗があると感じられる。

薬効分類別の使用割合

資料No.1-1



薬効分類別の使用割合

資料No.1-2

薬効分類別	協会けんぽ・国保合計		
	使用割合(%)	対象薬剤数	切替薬剤数
31 ビタミン剤	87.5	679,799	594,635
27 歯科口腔用薬	85.1	536	456
32 滋養強壯薬	83.6	131,288	109,753
33 血液・体液用薬	81.2	1,689,983	1,373,010
23 消化器官用薬	80.4	3,927,176	3,158,697
21 循環器官用薬	79.3	6,003,655	4,763,216
72 診断用薬(体外診断用医薬品を除く)	78.7	6,189	4,869
39 その他の代謝性医薬品	76.8	1,630,952	1,252,038
25 泌尿生殖器官及び肛門用薬	73.6	267,573	196,872
42 腫瘍用薬	72.8	93,042	67,704
22 呼吸器官用薬	72.6	1,331,565	966,748
29 その他の個々の器官系用医薬品	72.3	5,468	3,953
24 ホルモン剤(抗ホルモン剤を含む)	67.4	130,049	87,675
44 アレルギー用薬	67.4	1,028,142	692,997
62 化学療法剤	66.1	125,255	82,853
12 末梢神経系用薬	63.7	286,420	182,335
11 中枢神経系用薬	61.8	3,811,827	2,355,963
61 抗生物質製剤	61.2	382,065	233,749
26 外皮用薬	56.6	2,051,383	1,161,255
13 感覚器官用薬	56.4	272,799	153,723
82 非アルカロイド系麻薬	35.2	5,527	1,945
79 その他の治療を主目的としない医薬品	34.9	631	220
81 アルカロイド系麻薬(天然麻薬)	33.8	6,114	2,067
34 人工透析用薬	25.7	1,714	441
43 放射性医薬品	8.8	1,892	167

4. 統計結果 (2)年齢階級別の使用割合

(資料No.2-1、2-2)

○「若年層の使用割合の状況」

協会けんぽ、国保分の合計を年代別に見た場合、0歳から19歳までの若年層の使用割合が低い状況にあります。この年代においては、70%を下回る状況にあります。具体的には、0歳から4歳が67%、5歳から9歳が60.1%、10歳から14歳が61.4%、15歳から19歳が67.2%という状況でした。

○「高齢者の使用割合の状況」

年齢別に高齢者においては使用割合が高い状況にある、その中でも最も高い年齢階級が60歳から64歳の使用割合は75.6%と高い状況にあります。それでも国が目標とする令和2年9月末までに80%という目標値には届いていない状況でした。

○「若年層の使用割合の低い要因」

0歳から19歳の使用割合が低い状況は、県内で多くの市町村において義務教育終了まで窓口無料化が実施されていることから自己負担額に対するコスト意識が薄いことが要因の1つと考えられる。

○「高齢者の使用割合の高い要因」

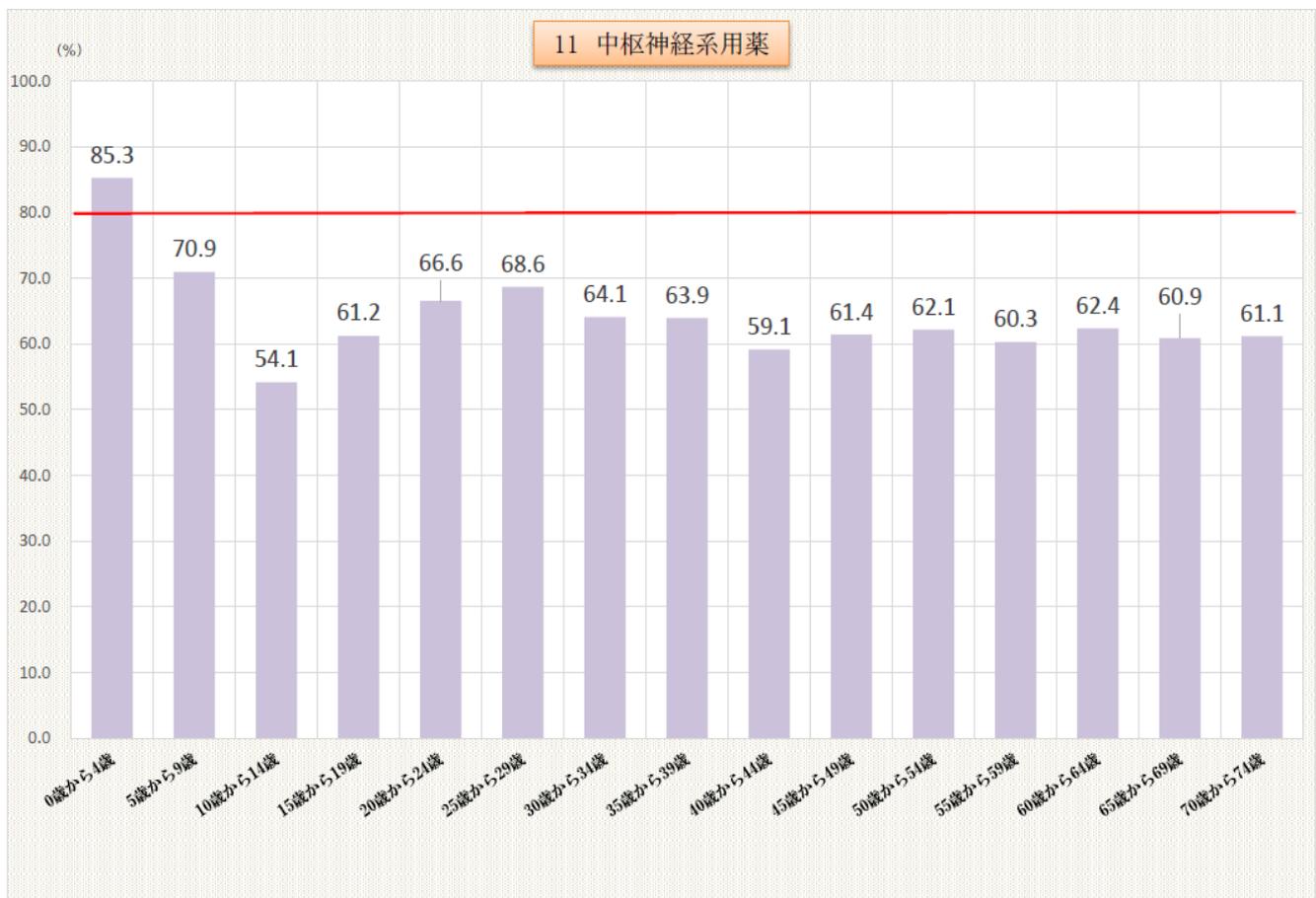
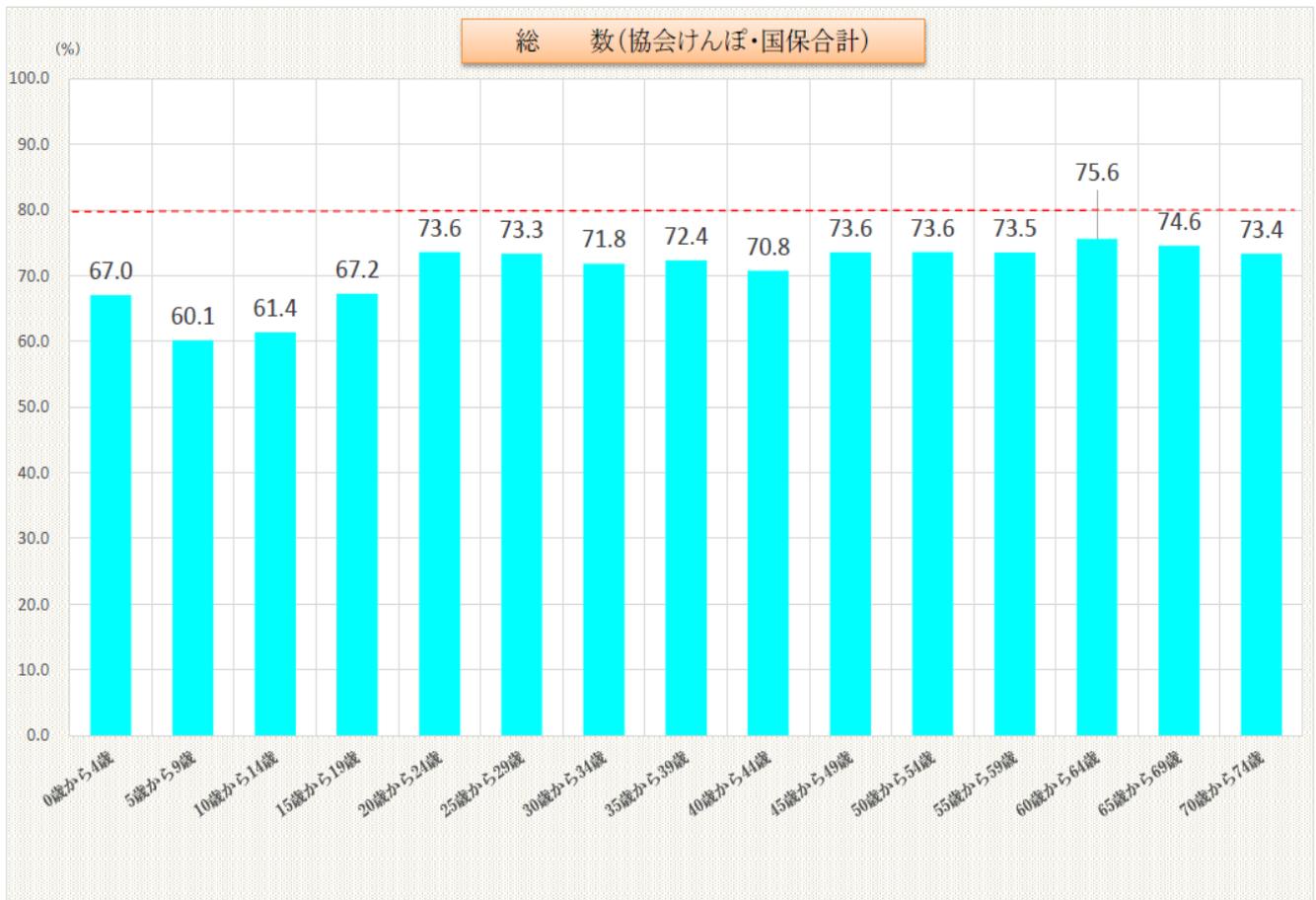
60歳以上75歳未満の使用割合が高い要因の一つとして、現役を退いた年金受給者、及び定年退職後に国保に加入する方は、現役時より収入が減ることから、自己負担額に対するコスト意識が高いことが考えられる。

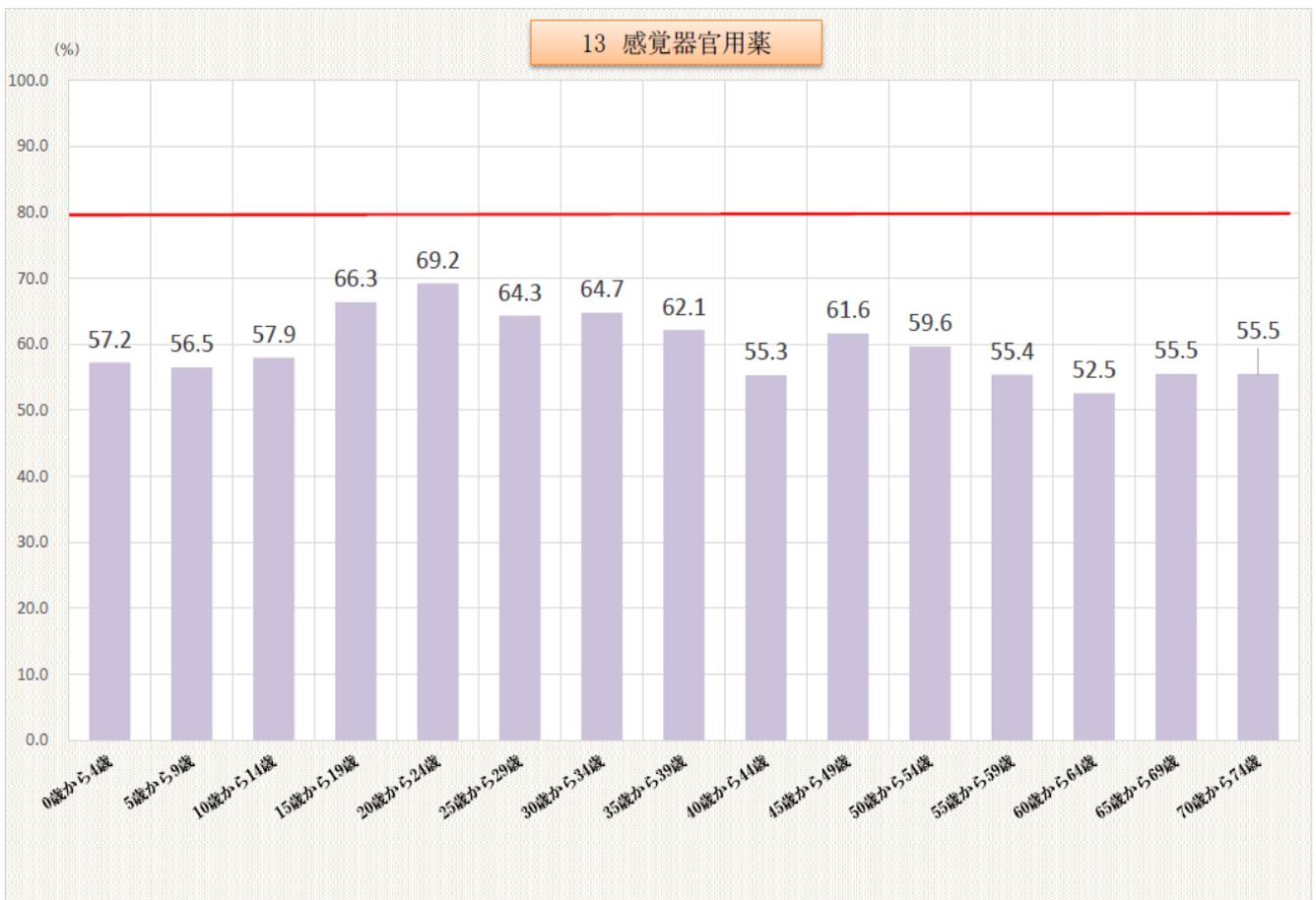
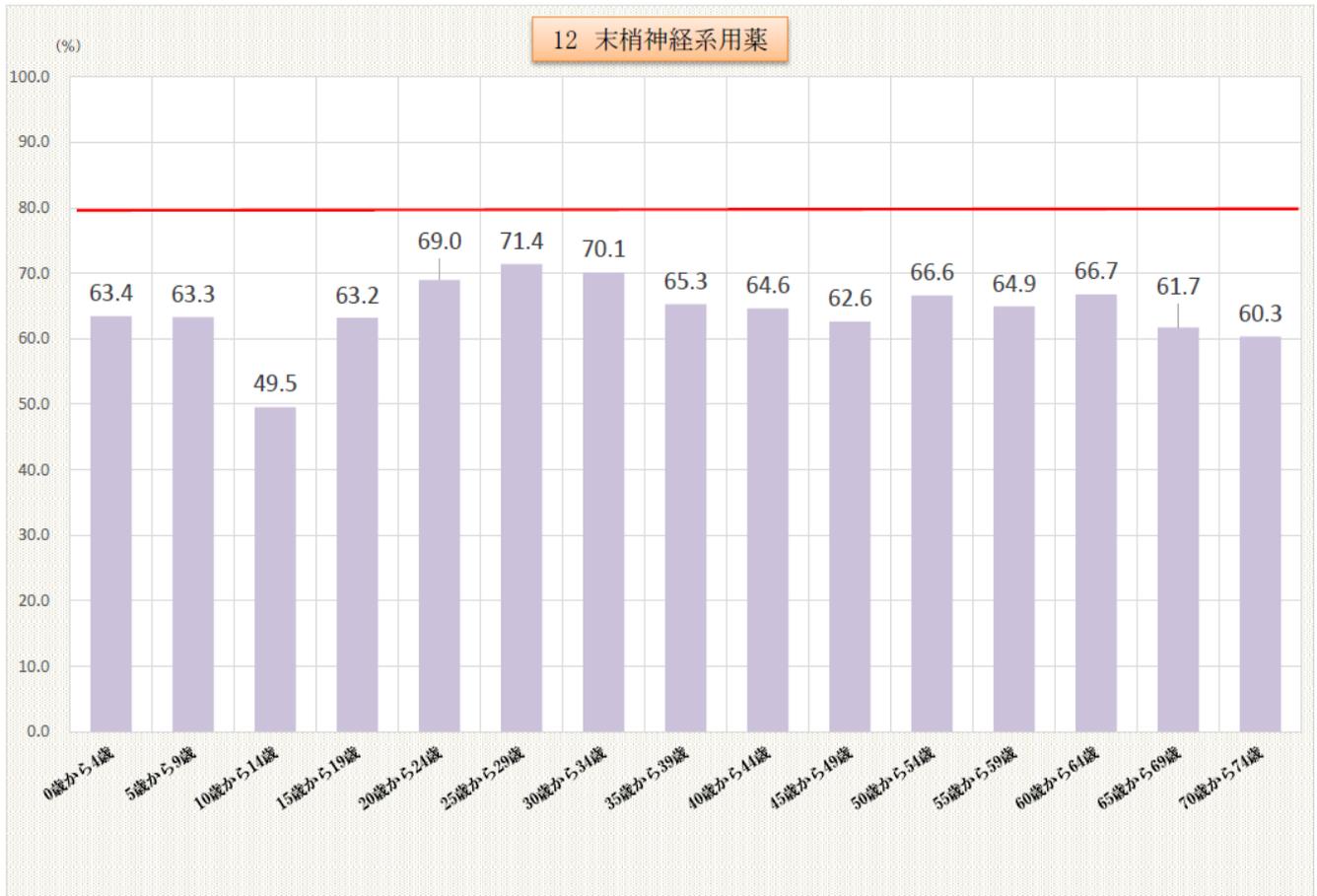
(%)

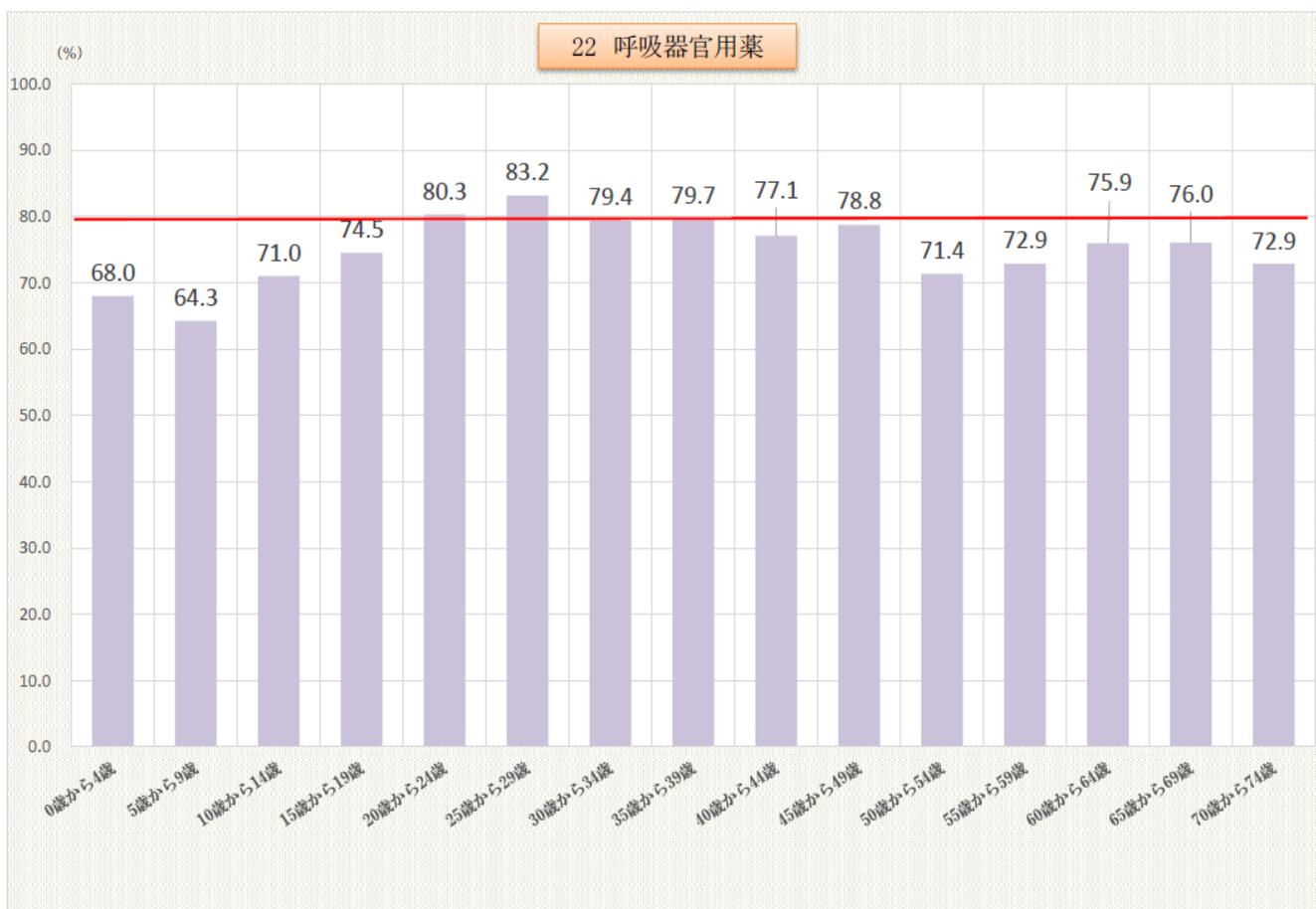
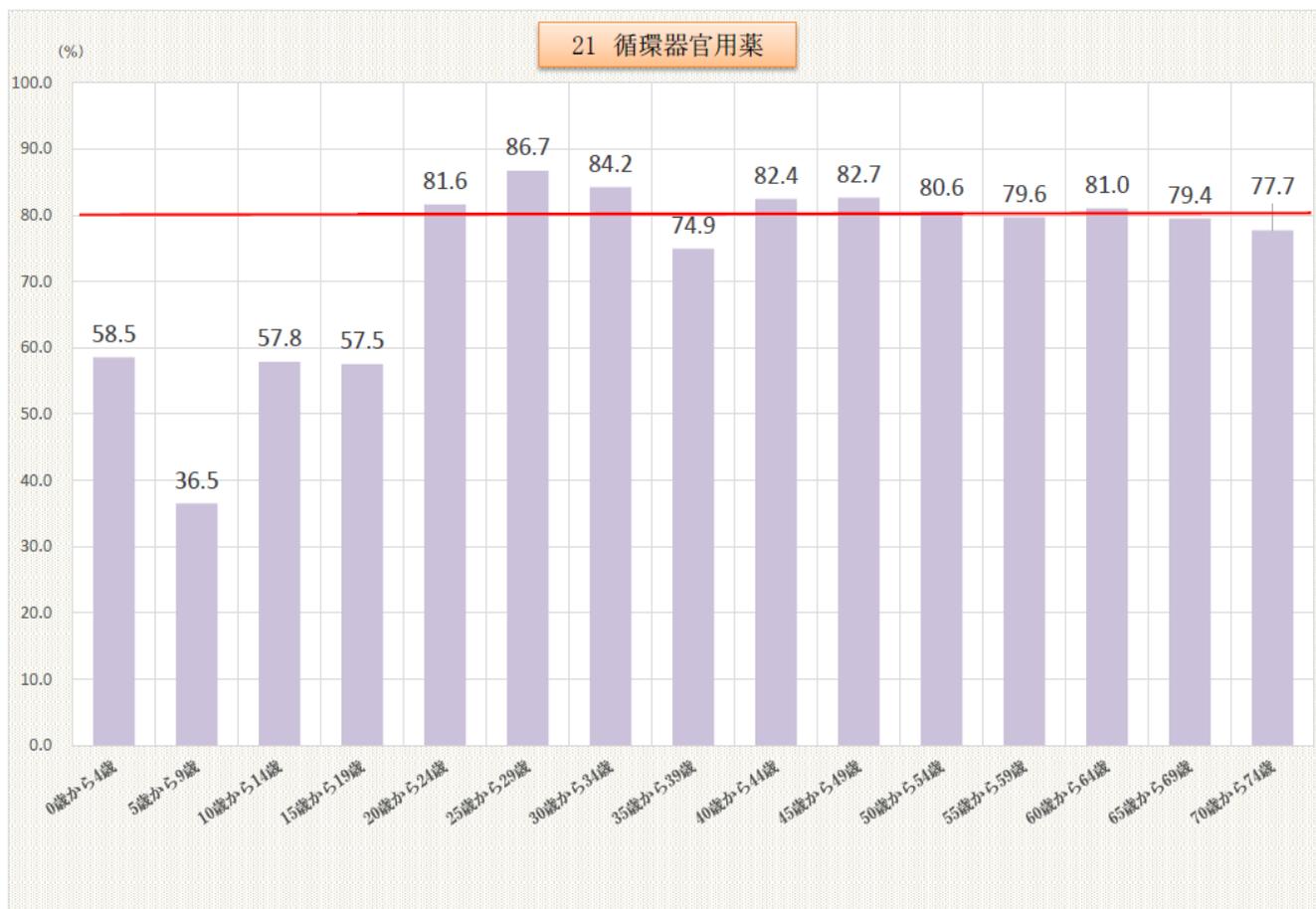
年齢階級	年齢階級別 使用割合比較
0歳から4歳	67.0
5歳から9歳	60.1
10歳から14歳	61.4
15歳から19歳	67.2
20歳から24歳	73.6
25歳から29歳	73.3
30歳から34歳	71.8
35歳から39歳	72.4
40歳から44歳	70.8
45歳から49歳	73.6
50歳から54歳	73.6
55歳から59歳	73.5
60歳から64歳	75.6
65歳から69歳	74.6
70歳から74歳	73.4

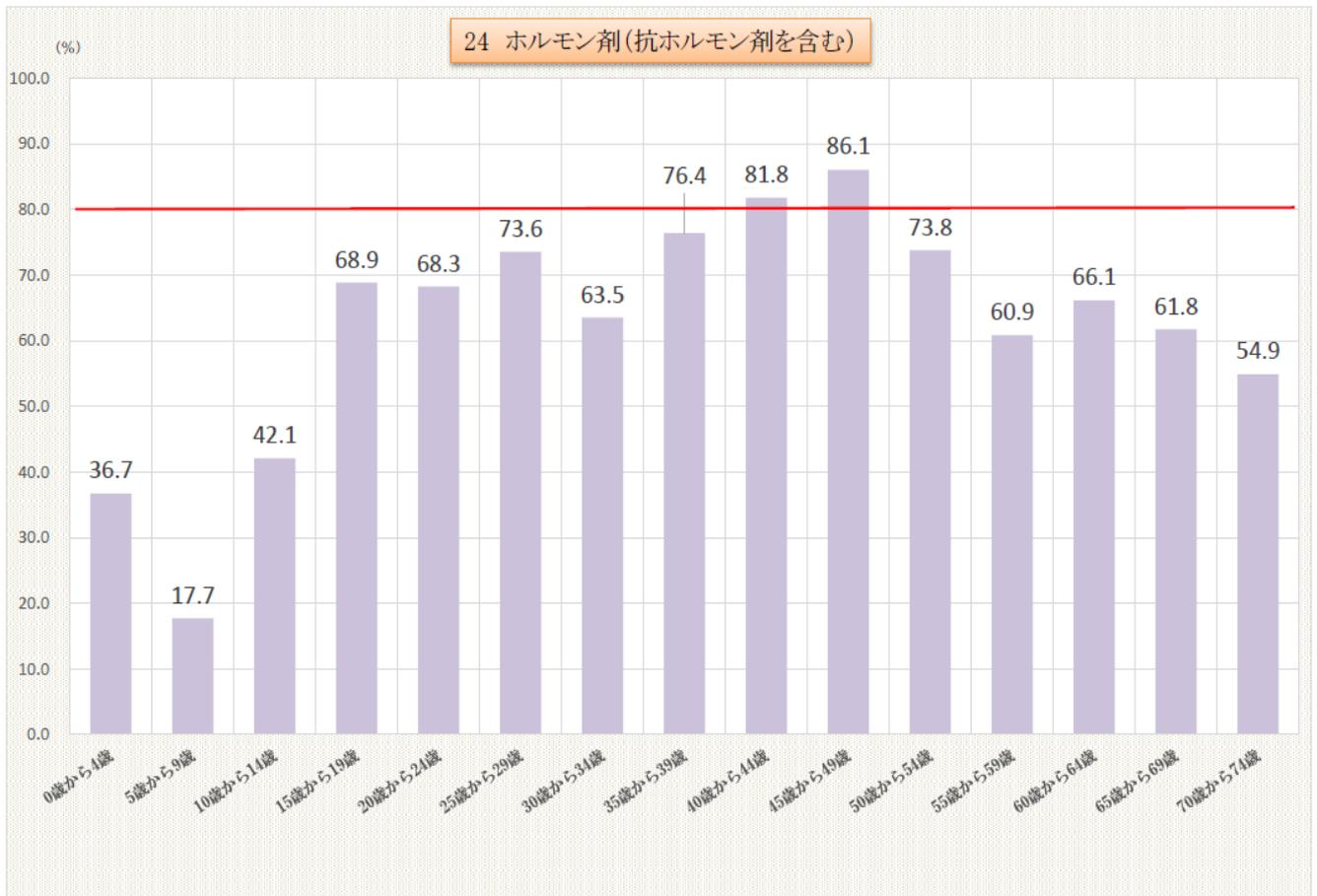
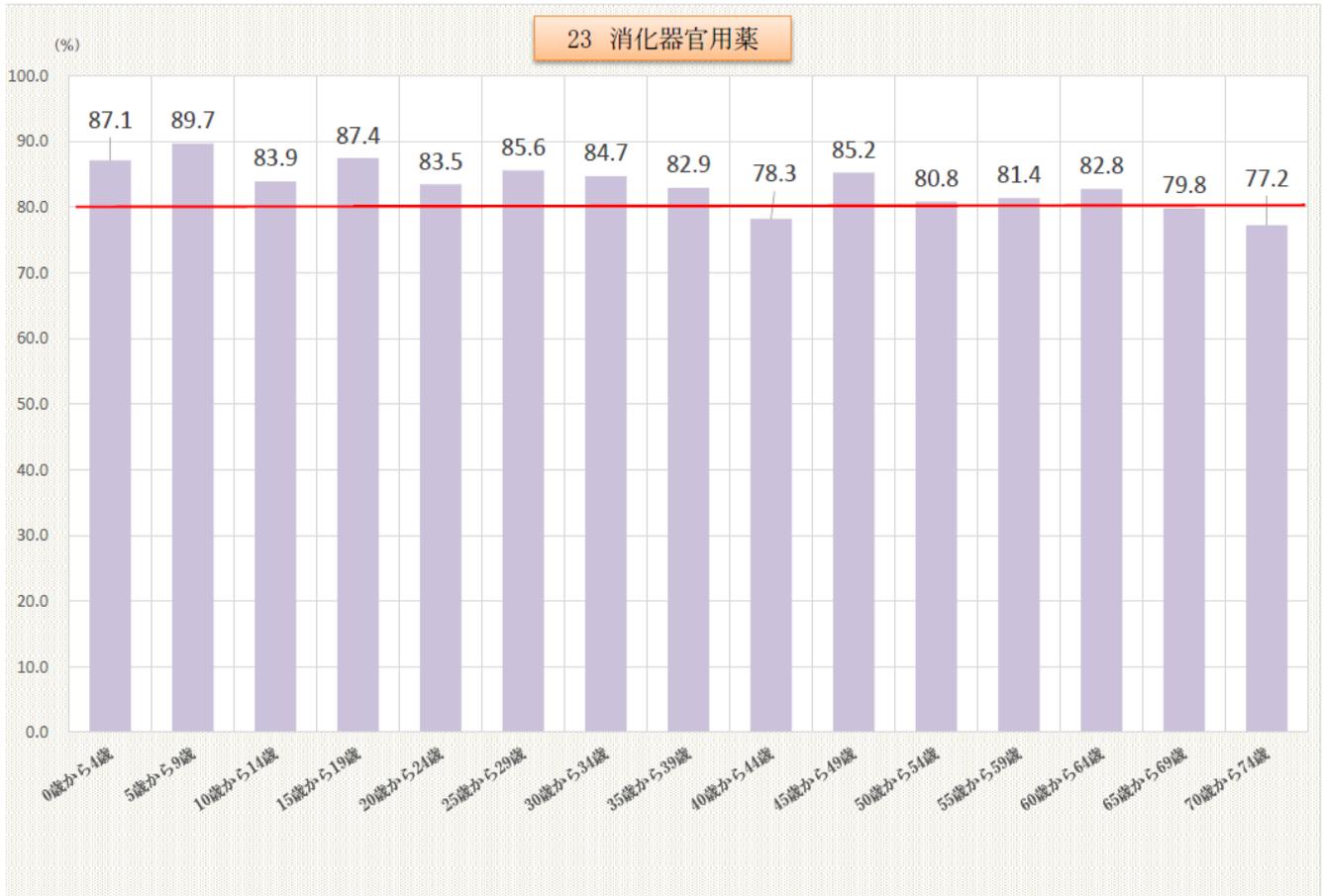
年齢階級別の使用割合

資料No.2-1



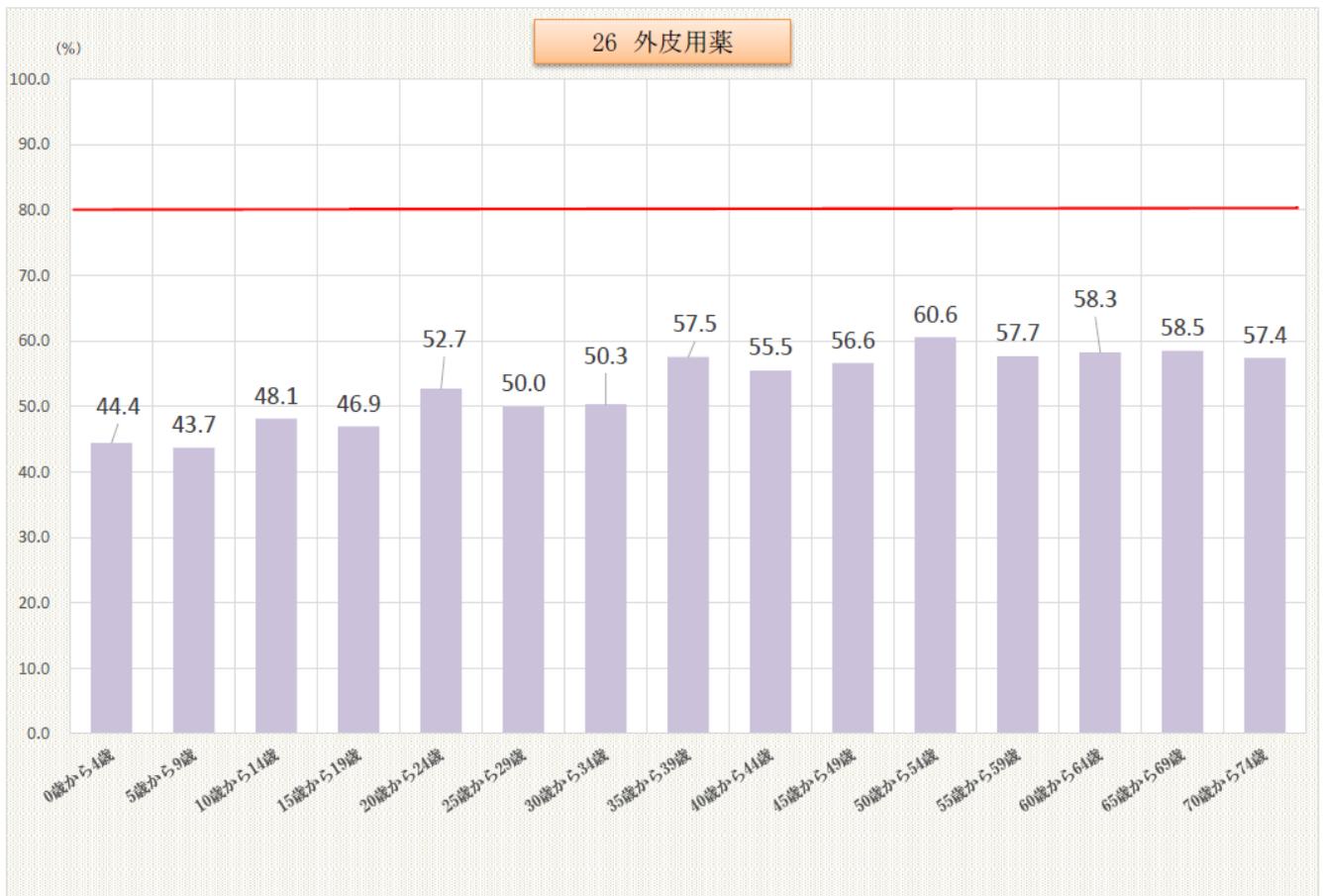
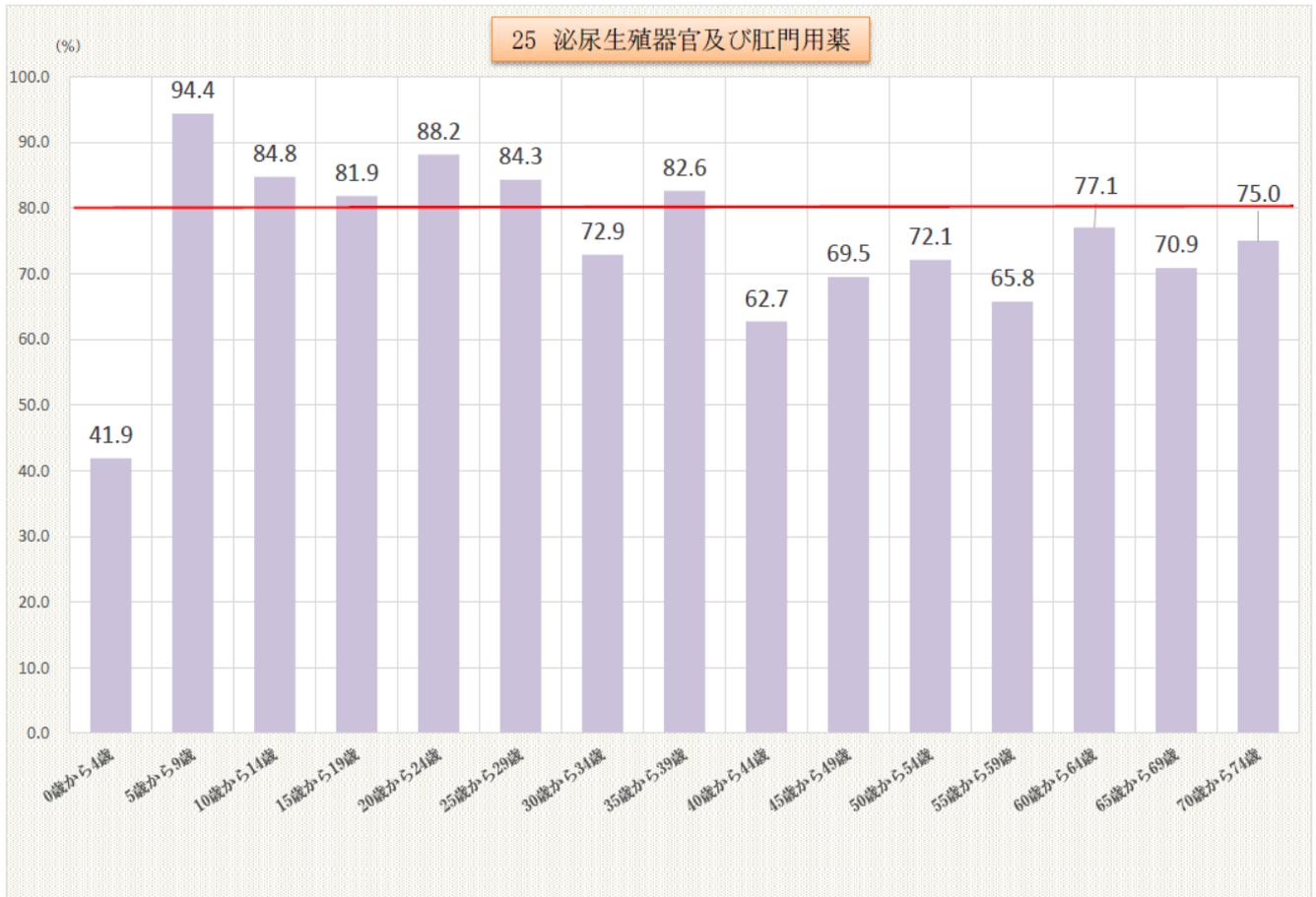






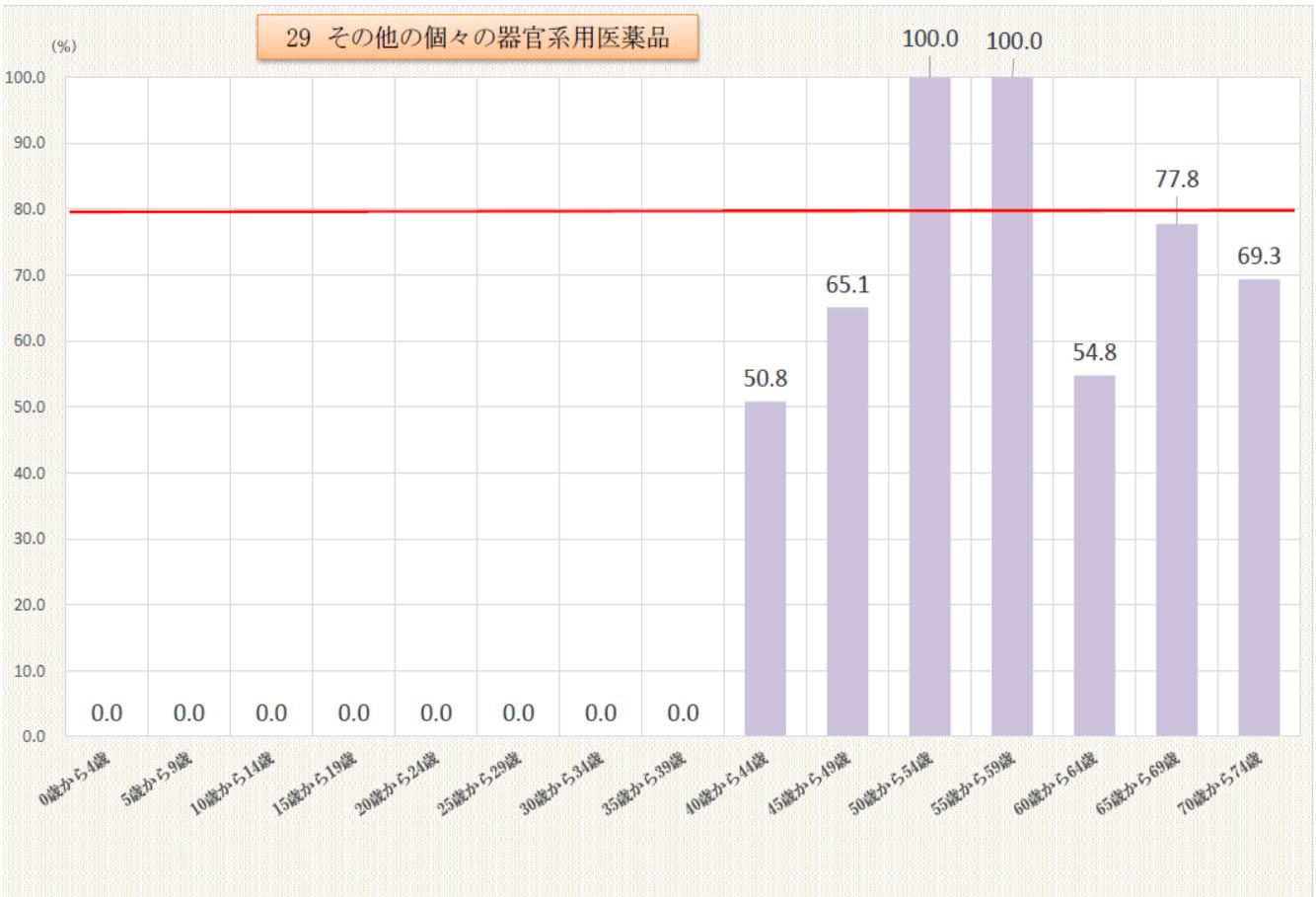
年齢階級別の使用割合

資料No.2-1



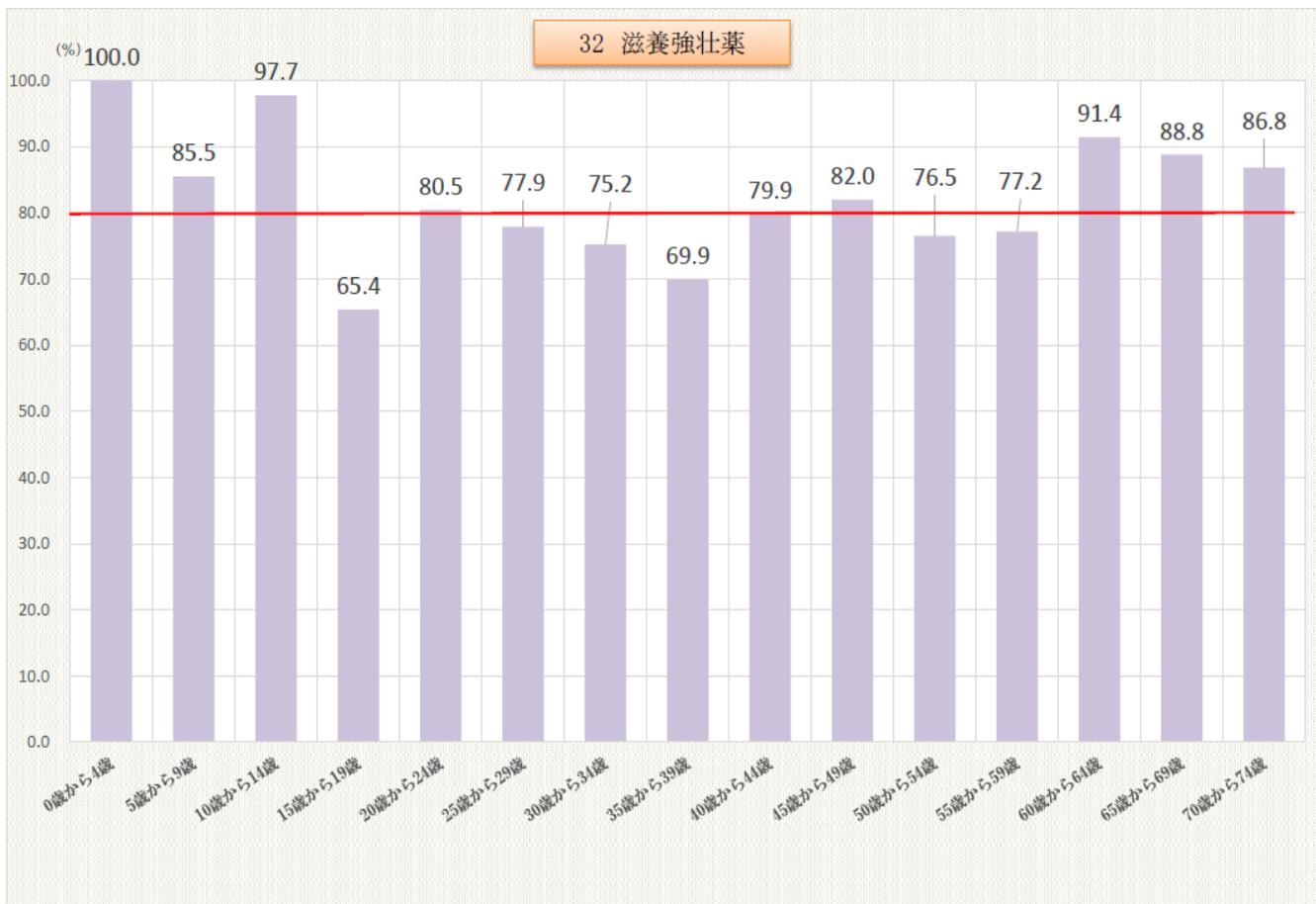
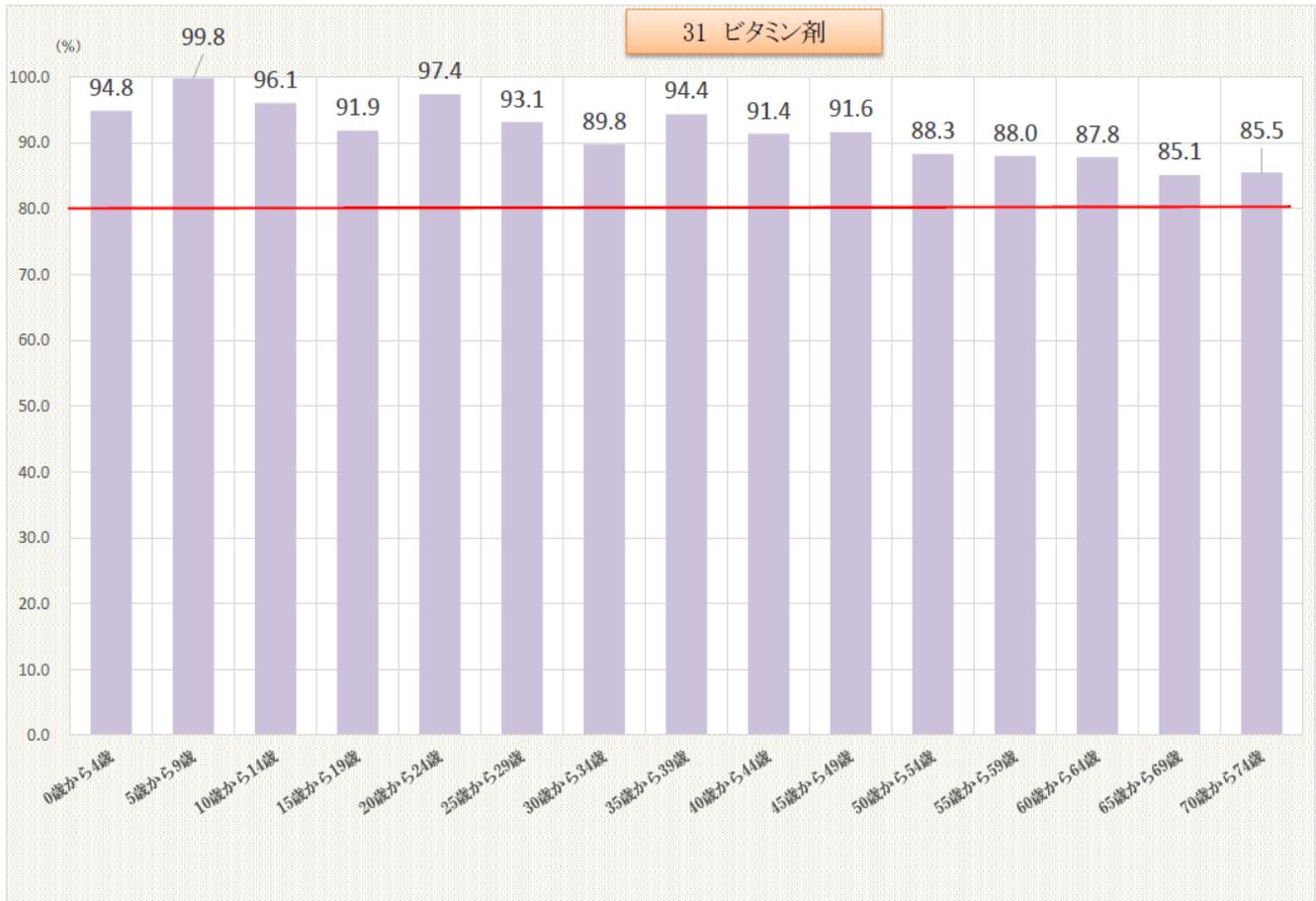
年齢階級別の使用割合

資料No.2-1



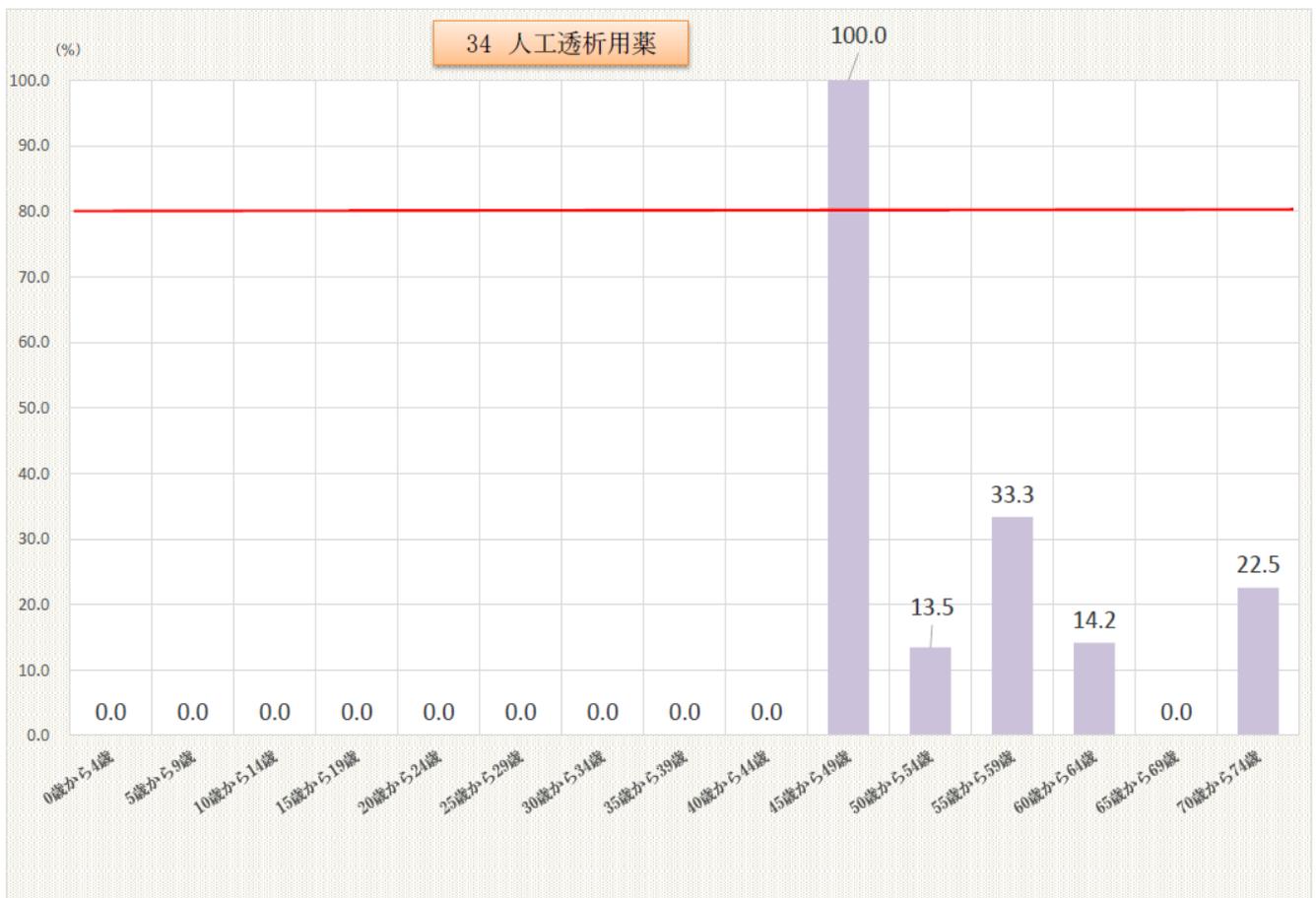
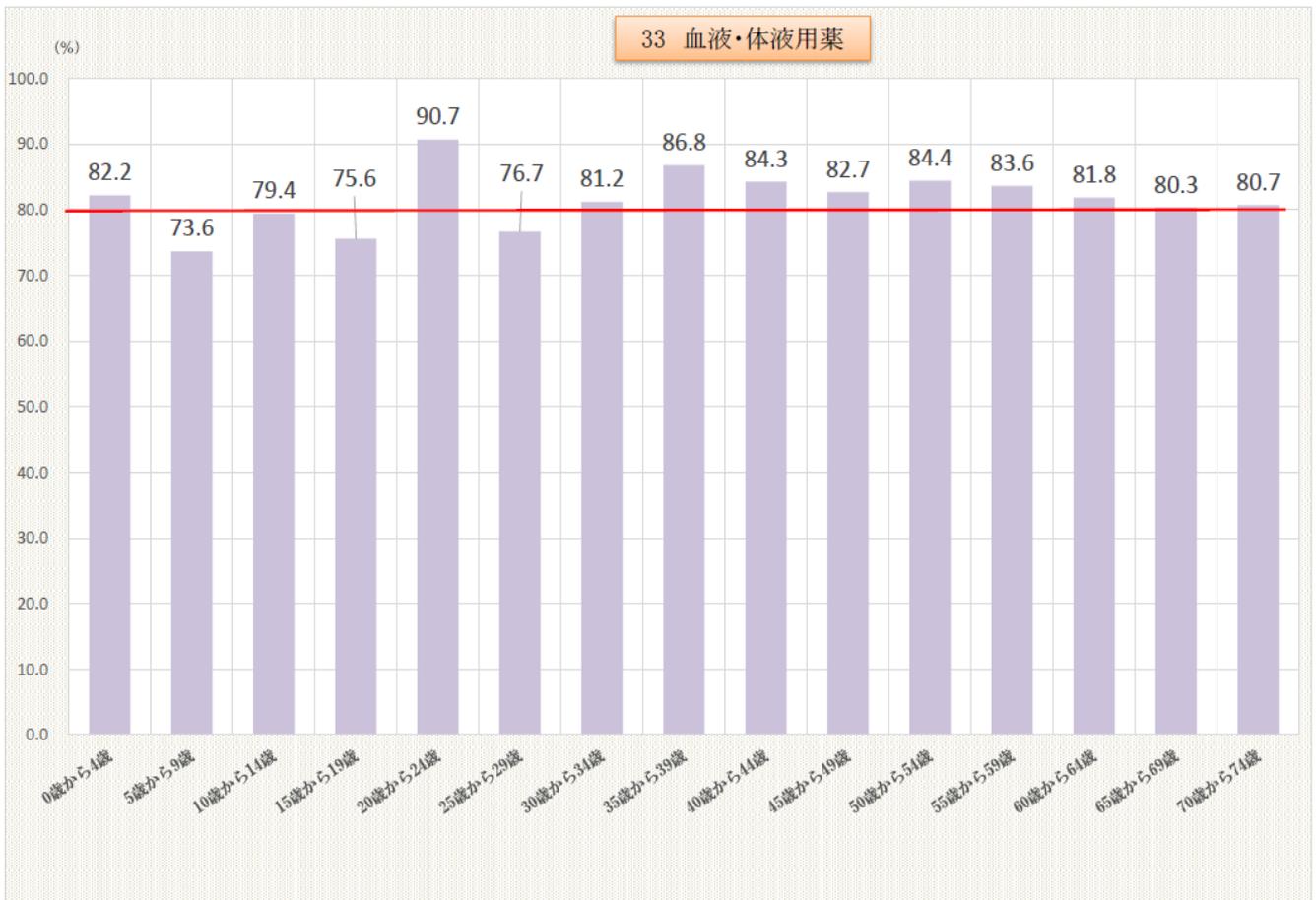
年齢階級別の使用割合

資料No.2-1



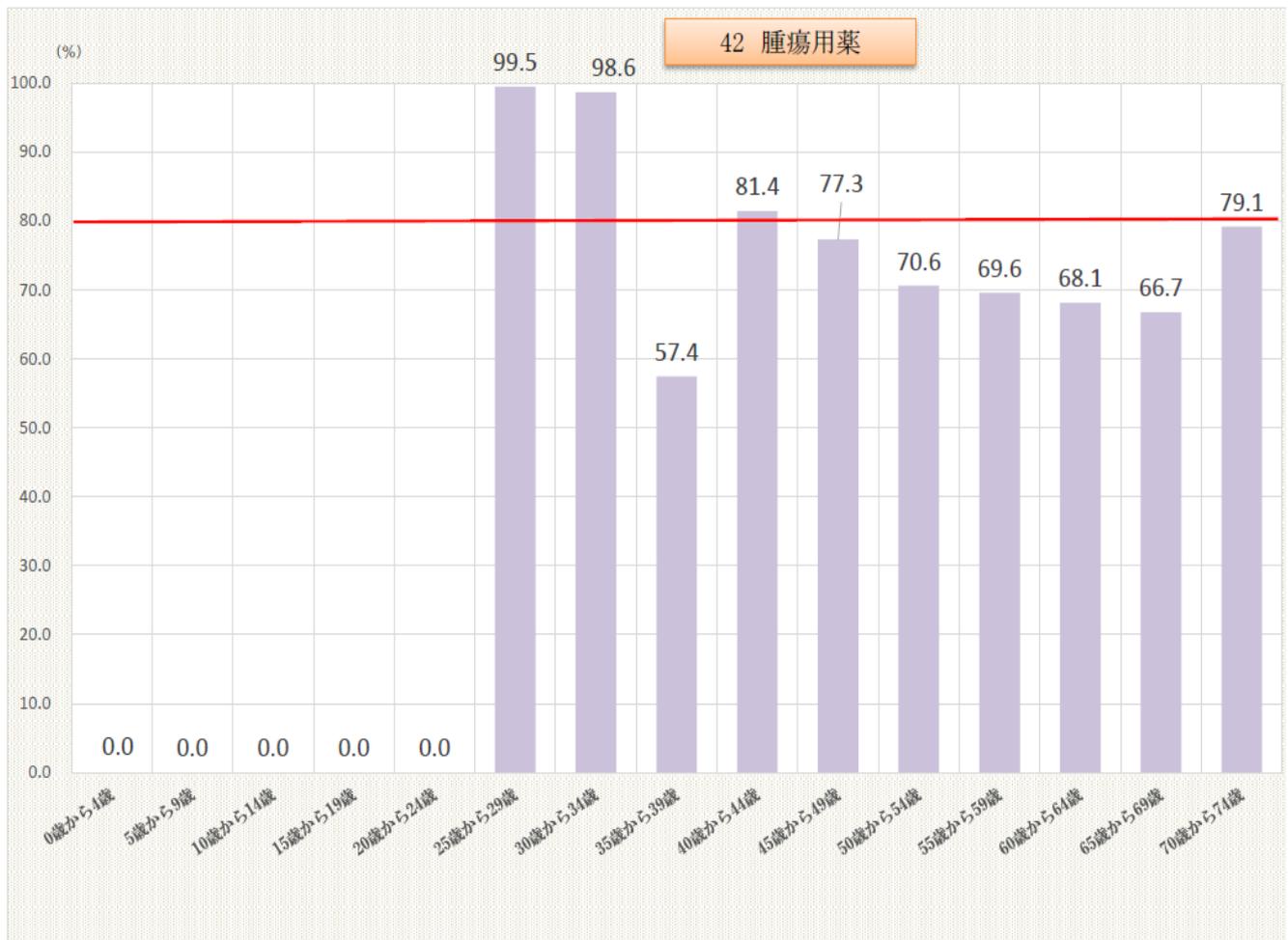
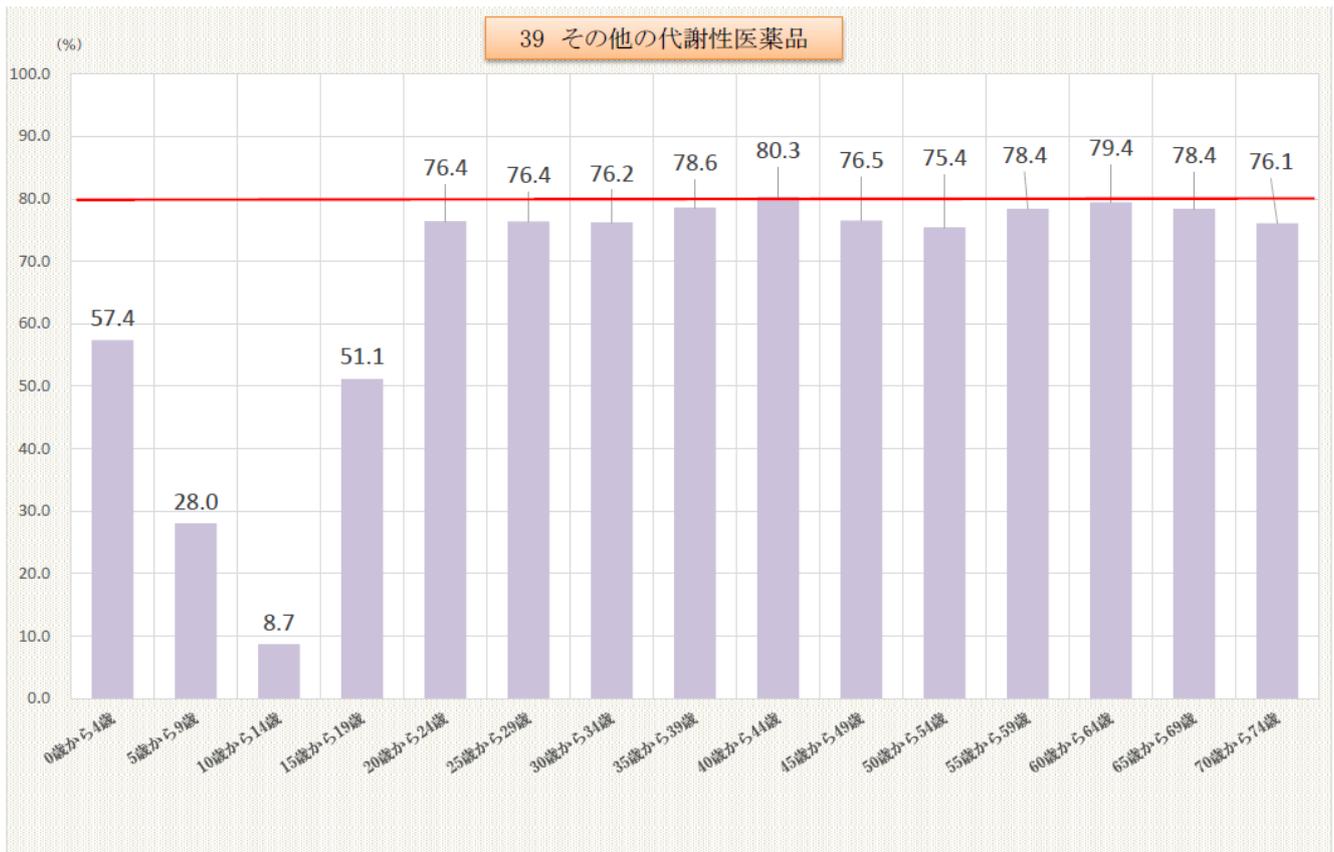
年齢階級別の使用割合

資料No.2-1



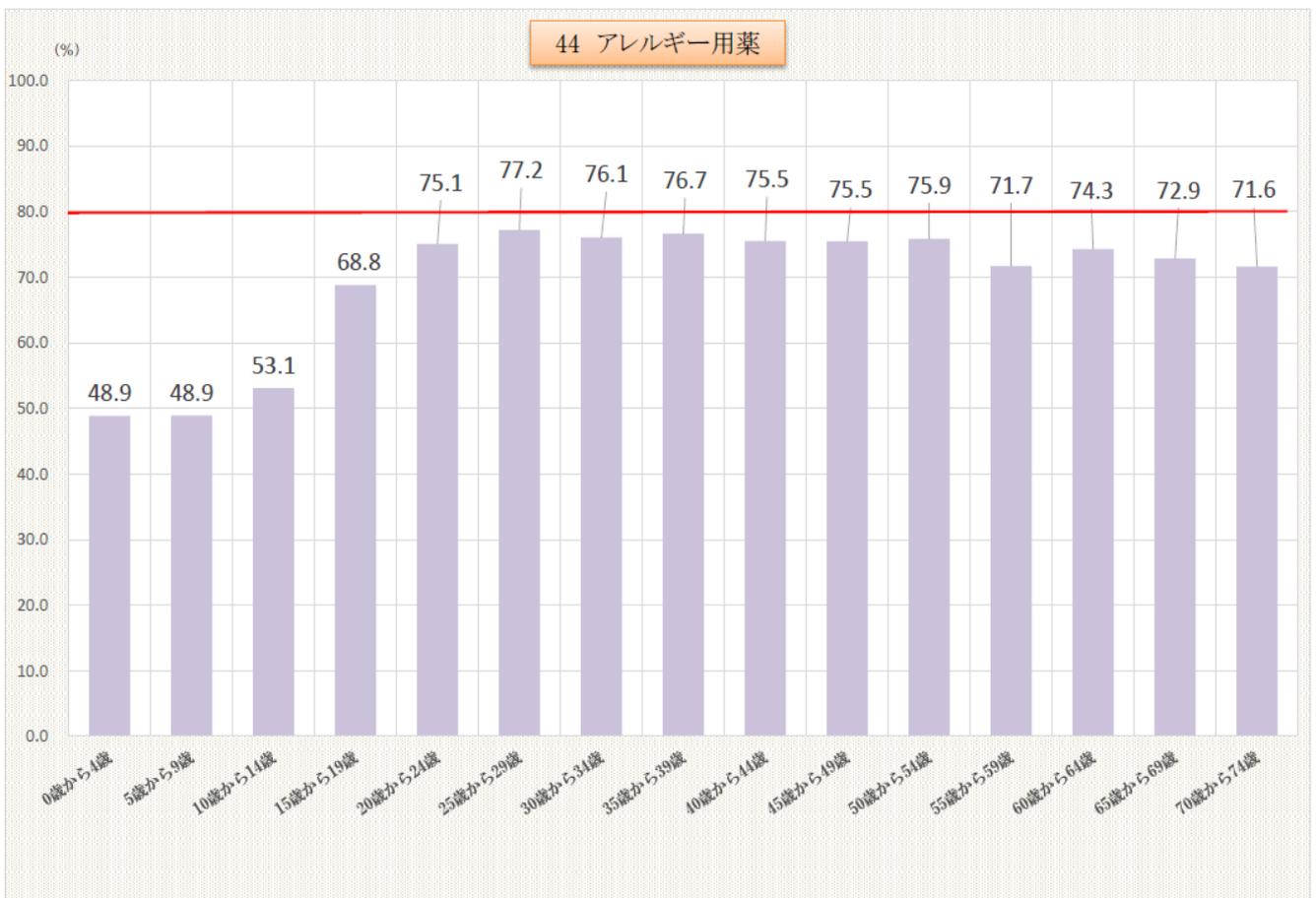
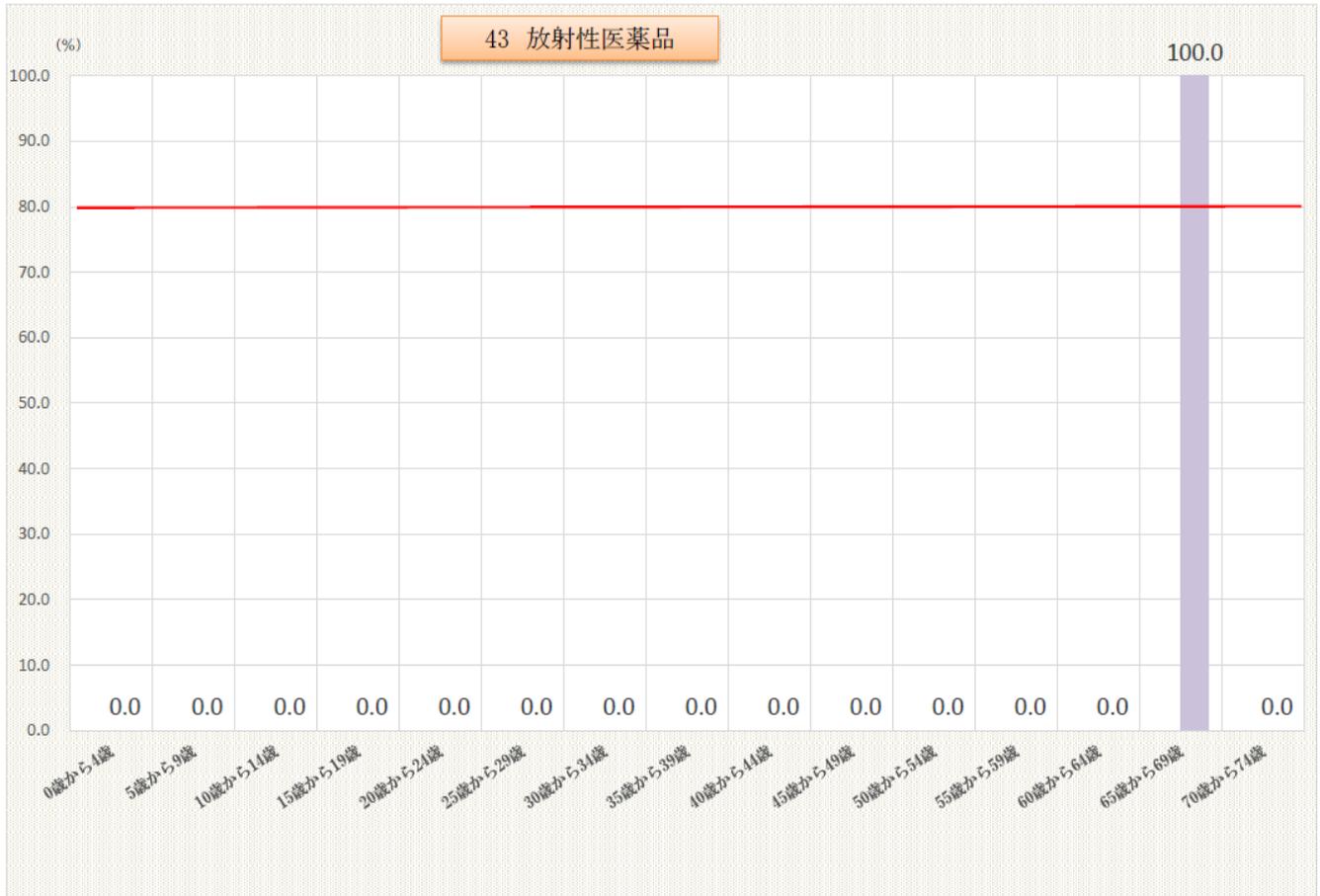
年齢階級別の使用割合

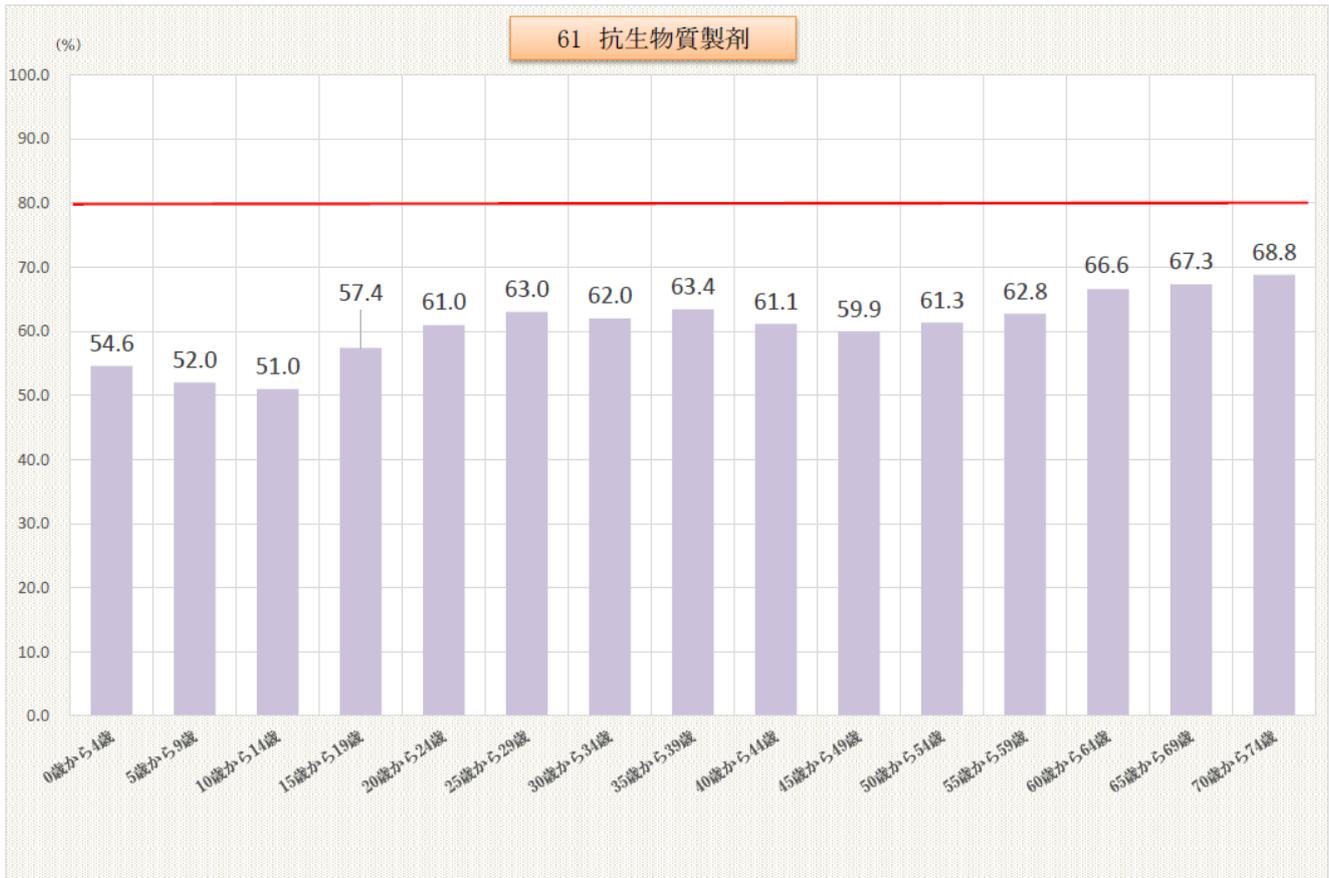
資料No.2-1

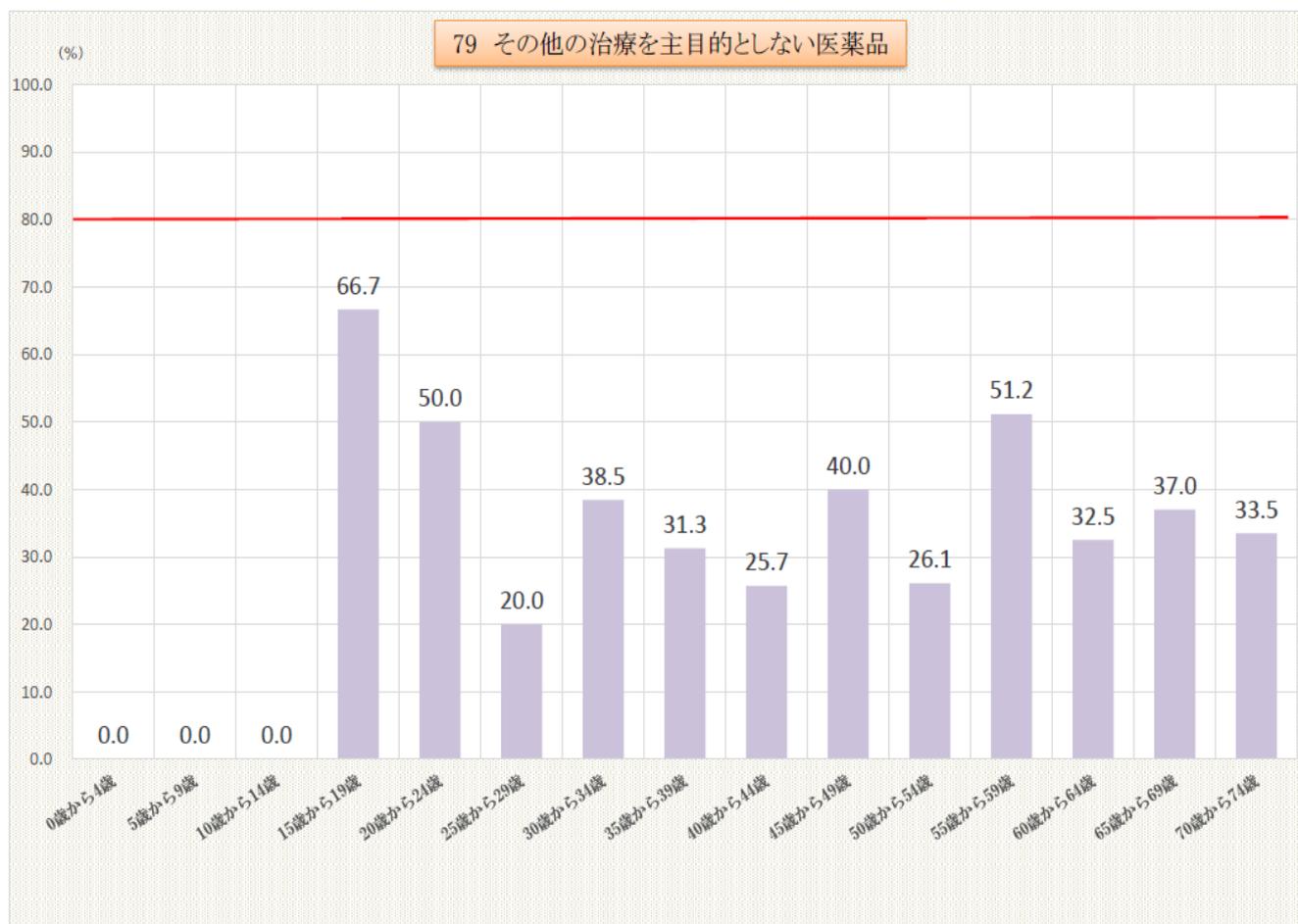
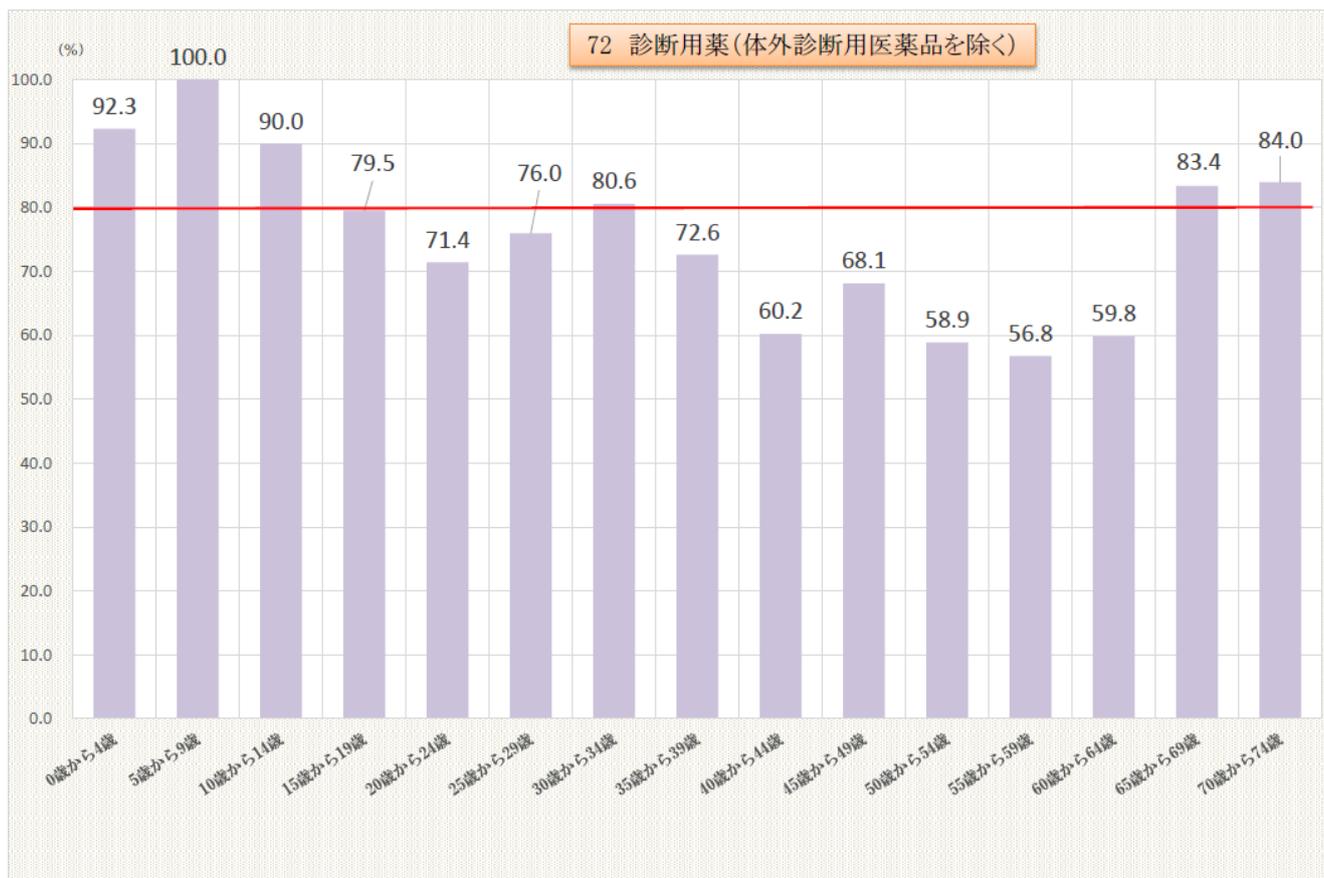


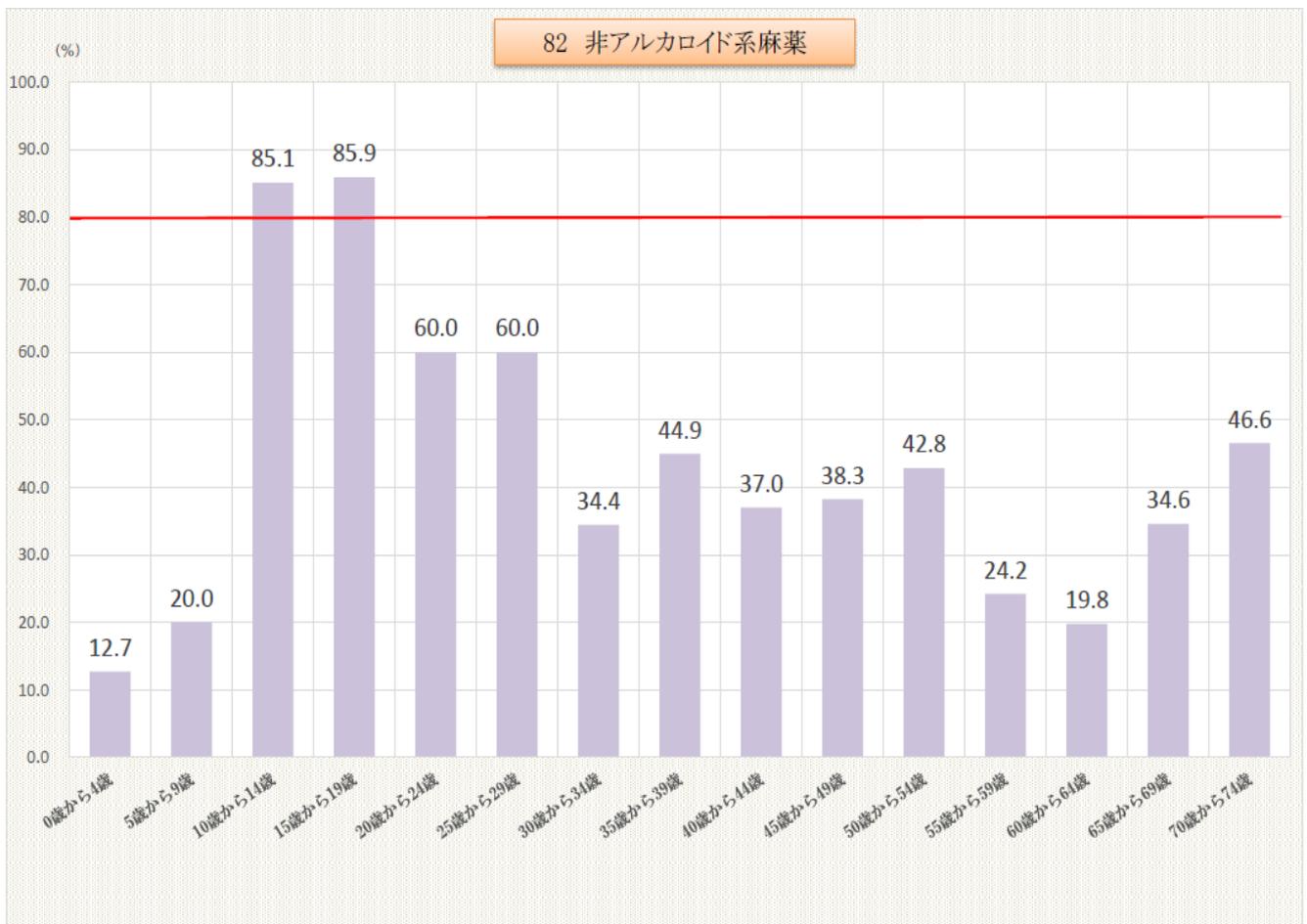
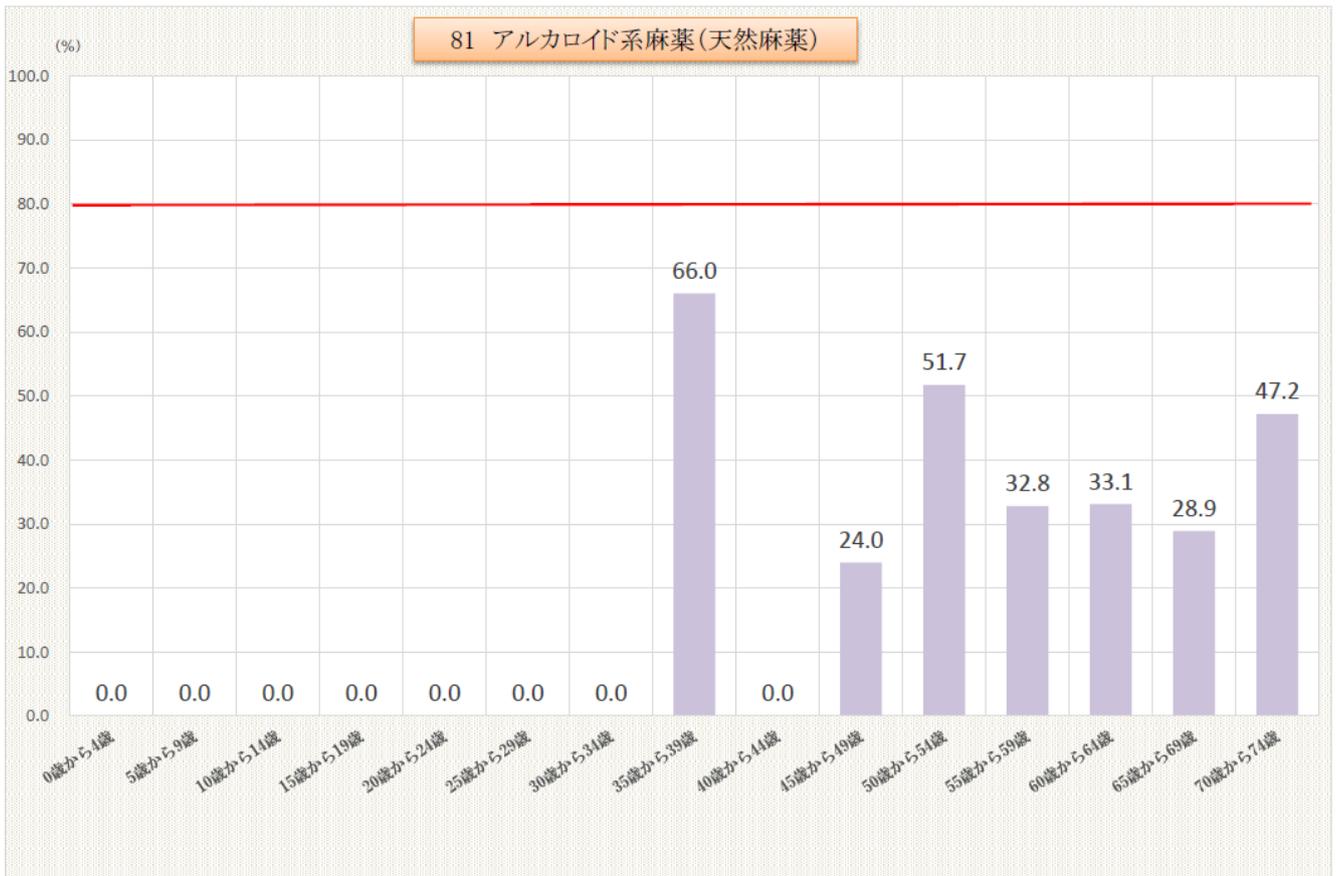
年齢階級別の使用割合

資料No.2-1









年齢階級別の使用割合

薬効分類別	0歳から4歳	5歳から9歳	10歳から14歳	15歳から19歳	20歳から24歳	25歳から29歳	30歳から34歳	35歳から39歳	40歳から44歳	45歳から49歳	50歳から54歳	55歳から59歳	60歳から64歳	65歳から69歳	70歳から74歳
	合計 使用割合(%)														
総数	67.0	60.1	61.4	67.2	73.6	73.3	71.8	72.4	70.8	73.6	73.6	73.5	75.6	74.6	73.4
11 中枢神経系用薬	85.3	70.9	54.1	61.2	66.6	68.6	64.1	63.9	59.1	61.4	62.1	60.3	62.4	60.9	61.1
12 末梢神経系用薬	63.4	63.3	49.5	63.2	69.0	71.4	70.1	65.3	64.6	62.6	66.6	64.9	66.7	61.7	60.3
13 感覚器用薬	57.2	56.5	57.9	66.3	69.2	64.3	64.7	62.1	55.3	61.6	59.6	55.4	52.5	55.5	55.5
19 その他の神経系及び感覚器用医薬品	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21 循環器用薬	58.5	36.5	57.8	57.5	81.6	86.7	84.2	74.9	82.4	82.7	80.6	79.6	81.0	79.4	77.7
22 呼吸器用薬	68.0	64.3	71.0	74.5	80.3	83.2	79.4	79.7	77.1	78.8	71.4	72.9	75.9	76.0	72.9
23 消化器用薬	87.1	89.7	83.9	87.4	83.5	85.6	84.7	82.9	78.3	85.2	80.8	81.4	82.8	79.8	77.2
24 ホルモン剤(抗ホルモン剤を含む)	36.7	17.7	42.1	68.9	68.3	73.6	63.5	76.4	81.8	86.1	73.8	60.9	66.1	61.8	54.9
25 泌尿生殖器用薬及び肛門用薬	41.9	94.4	84.8	81.9	88.2	84.3	72.9	82.6	62.7	69.5	72.1	65.8	77.1	70.9	75.0
26 外皮用薬	44.4	43.7	48.1	46.9	52.7	50.0	50.3	57.5	55.5	56.6	60.6	57.7	58.3	58.5	57.4
27 歯科口腔用薬	—	100.0	100.0	100.0	100.0	93.9	91.3	97.1	85.2	95.0	80.8	84.6	73.6	72.9	71.4
29 その他の個々の器官系用医薬品	—	—	—	—	—	—	—	—	50.8	65.1	100.0	100.0	54.8	77.8	69.3
31 ビタミン剤	94.8	99.8	96.1	91.9	97.4	93.1	89.8	94.4	91.4	91.6	86.3	88.0	87.8	85.1	85.5
32 滋養強壮薬	100.0	85.5	97.7	65.4	80.5	77.9	75.2	69.9	79.9	82.0	76.5	77.2	91.4	88.8	86.8
33 血液・体液用薬	82.2	73.6	79.4	75.6	90.7	76.7	81.2	86.8	84.3	82.7	84.4	83.6	81.8	80.3	80.7
34 人工透析用薬	—	—	—	—	—	—	—	0.0	—	100.0	13.5	33.3	14.2	0.0	22.5
39 その他の代謝性医薬品	57.4	28.0	8.7	51.1	76.4	76.4	76.2	78.6	80.3	76.5	75.4	78.4	79.4	78.4	76.1
41 細胞賦活用薬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
42 腫瘍用薬	—	—	—	—	—	99.5	98.6	57.4	81.4	77.3	70.6	69.6	68.1	66.7	79.1
43 放射性医薬品	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.0	100.0	0.0
44 アレルギー用薬	48.9	48.9	53.1	68.8	75.1	77.2	76.1	76.7	75.5	75.5	75.9	71.7	74.3	72.9	71.6
49 その他の組織細胞機能用医薬品	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
51 生薬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
52 漢方製剤	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
59 その他の生薬及び漢方処方に基づく医薬品	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
61 抗生物質製剤	54.6	52.0	51.0	57.4	61.0	63.0	62.0	63.4	61.1	59.9	61.3	62.8	66.6	67.3	68.8
62 化学療法剤	49.2	35.9	44.1	63.3	54.5	73.6	71.1	74.3	63.1	67.9	66.1	66.6	73.8	62.1	68.4
63 生物学的製剤	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
64 寄生動物用薬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
69 その他の病原生物に対する医薬品	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
71 調剤用薬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
72 診断用薬(体外診断用医薬品を除く)	92.3	100.0	90.0	79.5	71.4	76.0	80.6	72.6	60.2	68.1	58.9	56.8	59.8	83.4	84.0
73 公衆衛生用薬	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
74 体外診断用医薬品	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
79 その他の治療を主目的としない医薬品	—	—	—	66.7	50.0	20.0	38.5	31.3	25.7	40.0	26.1	51.2	32.5	37.0	33.5
81 アルカロイド系麻薬(天然麻薬)	—	—	—	—	—	—	—	66.0	0.0	24.0	51.7	32.8	33.1	28.9	47.2
82 非アルカロイド系麻薬	12.7	20.0	85.1	85.9	60.0	60.0	34.4	44.9	37.0	38.3	42.8	24.2	19.8	34.6	46.6

4. 統計結果 (3)若年層における薬効分類別の使用割合

(資料No.3-1.3-2.3-3.3-4)

《0歳から19歳において使用割合の薬剤の状況》

若年層での使用割合が低い薬剤については、非アルカロイド系麻薬、ホルモン剤【抗ホルモン剤を含む】、その他の代謝性医薬品、放射性医薬品、泌尿器生殖器官及び肛門薬、外皮用薬、抗生物質製剤という結果になりました。

《年齢階級別の使用割合の高い薬剤の状況》

0歳から19歳の年齢階級において、使用割合が高い薬剤は0歳から4歳は滋養強壮剤100.0%、ビタミン剤94.8%、診断用薬【体外診断医薬品を除く】82.2%でした。

5歳から9歳は歯科口腔用薬100%、診断用薬【体外診断用医薬品を除く】100%、ビタミン剤99.8%でした。

10歳から14歳は歯科口腔用薬100%、滋養強壮剤97.7%、ビタミン剤96.1%でした。

15歳から19歳は歯科口腔用薬100%、滋養強壮剤91.9%、ビタミン剤87.4%でした。

《年齢階級別の使用割合の低い薬剤の状況》

若年層での使用割合が高い薬剤については、滋養強壮剤、ビタミン剤、診断用薬【体外診断医薬品を除く】、歯科口腔用薬の使用割合が高い結果となりました。

0歳から19歳の全ての年齢階級において使用割合が低い薬剤は0歳から4歳は非アルカロイド系麻薬12.7%、ホルモン剤【抗ホルモン剤を含む】36.7%、泌尿器生殖器官及び肛門用薬41.9%でした。

5歳から9歳はホルモン剤【抗ホルモン剤を含む】17.7%、非アルカロイド系麻薬20.0%、その他の代謝性医薬品28.0%でした。

10歳から14歳は放射性医薬品0.0%、その他の代謝性医薬品8.7%、ホルモン剤【抗ホルモン剤を含む】42.1%でした。

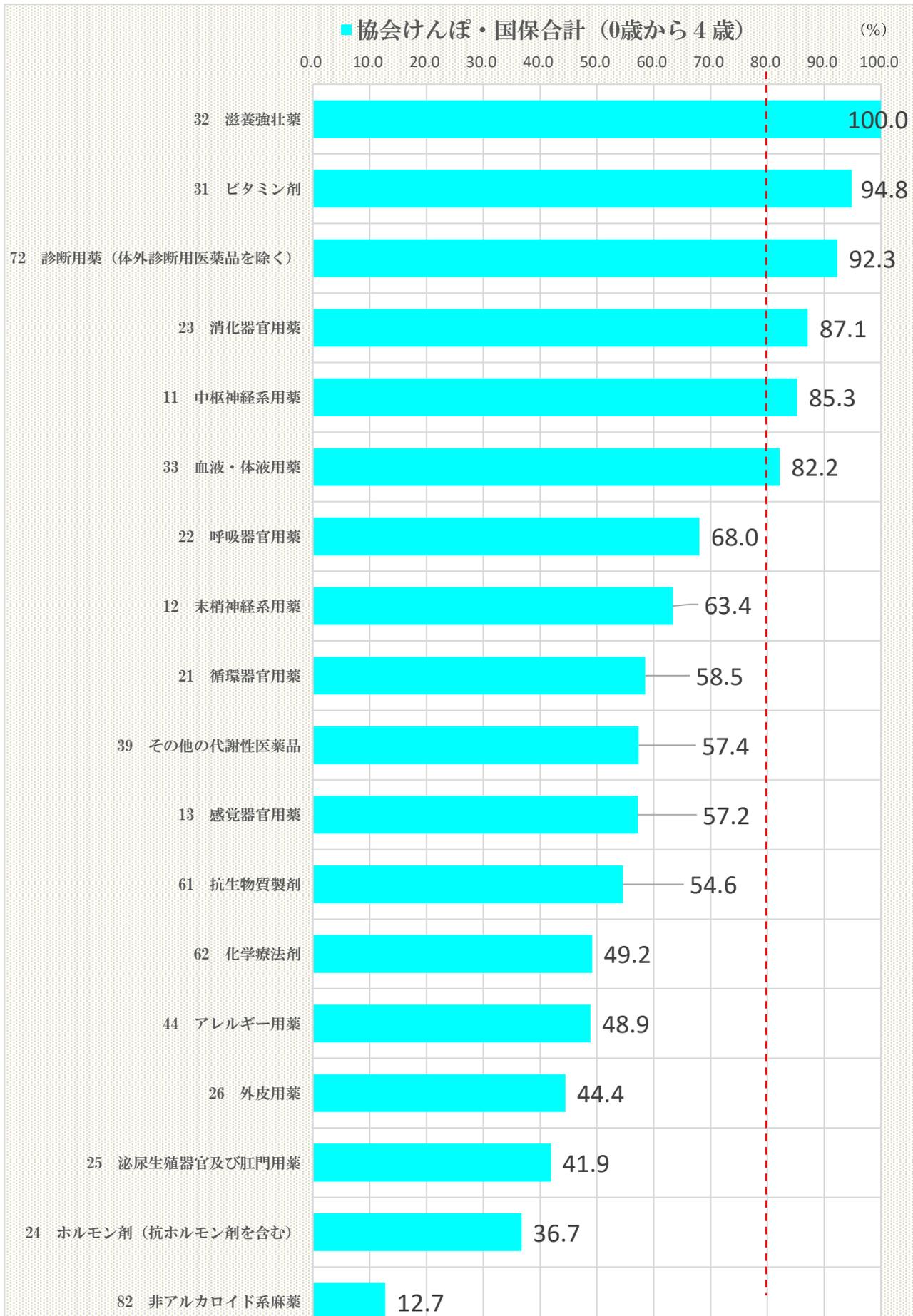
15歳から19歳は歯放射性医薬品46.9%、その他の代謝性医薬品51.1%、抗生物質製剤57.4%でした。

【0歳から4歳薬効分類別の使用割合状況】

使用割合が高い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合	使用割合が低い薬剤名 (切替薬剤÷対象薬剤)	使用割合
滋養強壮剤 (2,793÷2,793)	100.0%	非アルカロイド系麻薬 (10÷78)	12.7%
ビタミン剤 (46÷49)	94.8%	ホルモン剤 【抗ホルモン剤を含む】 (258÷702)	36.7%
診断用薬 【体外診断用医薬品を除く】 (24÷26)	92.3%	泌尿器生殖器官及び肛門用薬 (62÷148)	41.9%

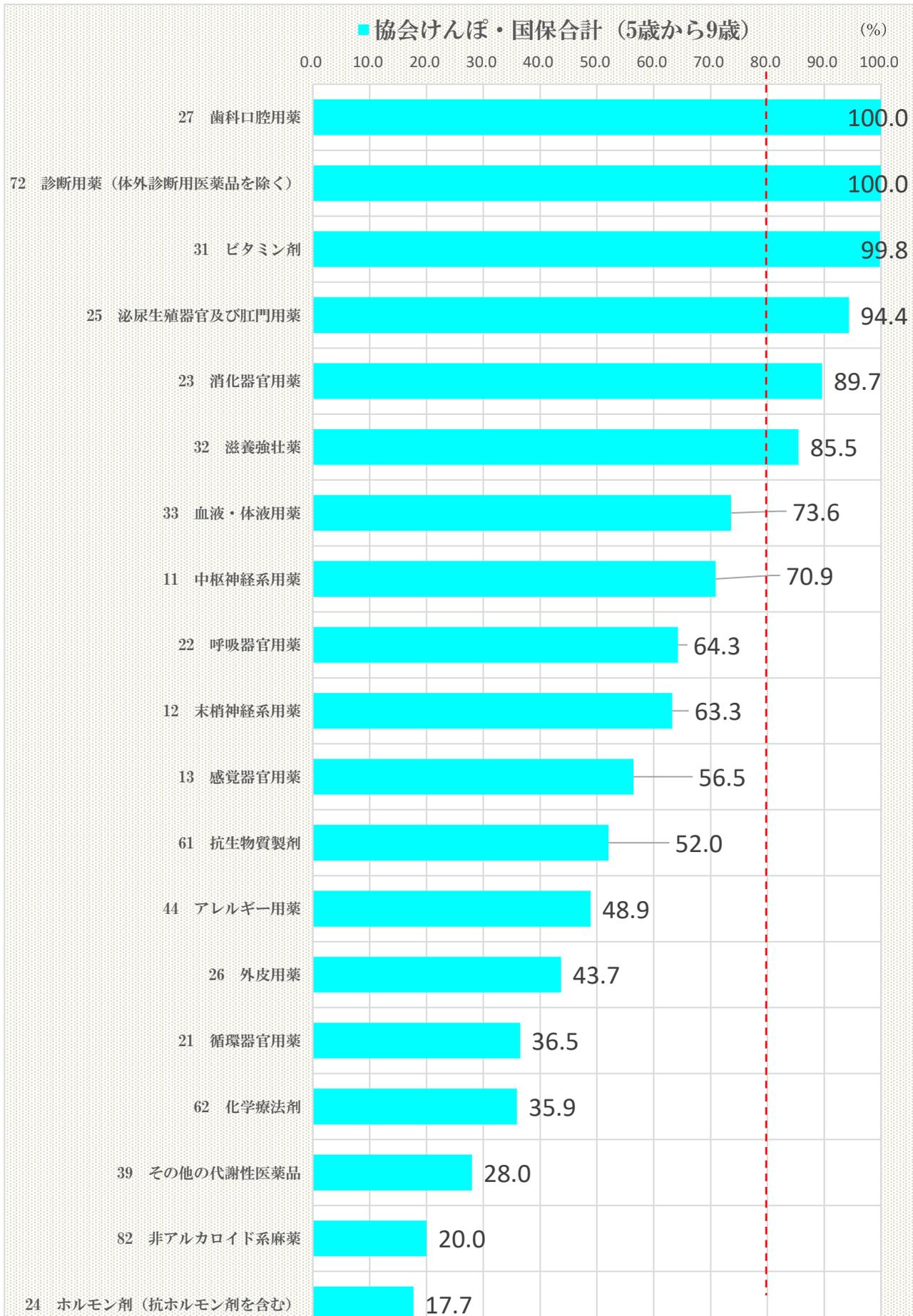
若年層における薬効分類別の使用割合

資料No.3-1



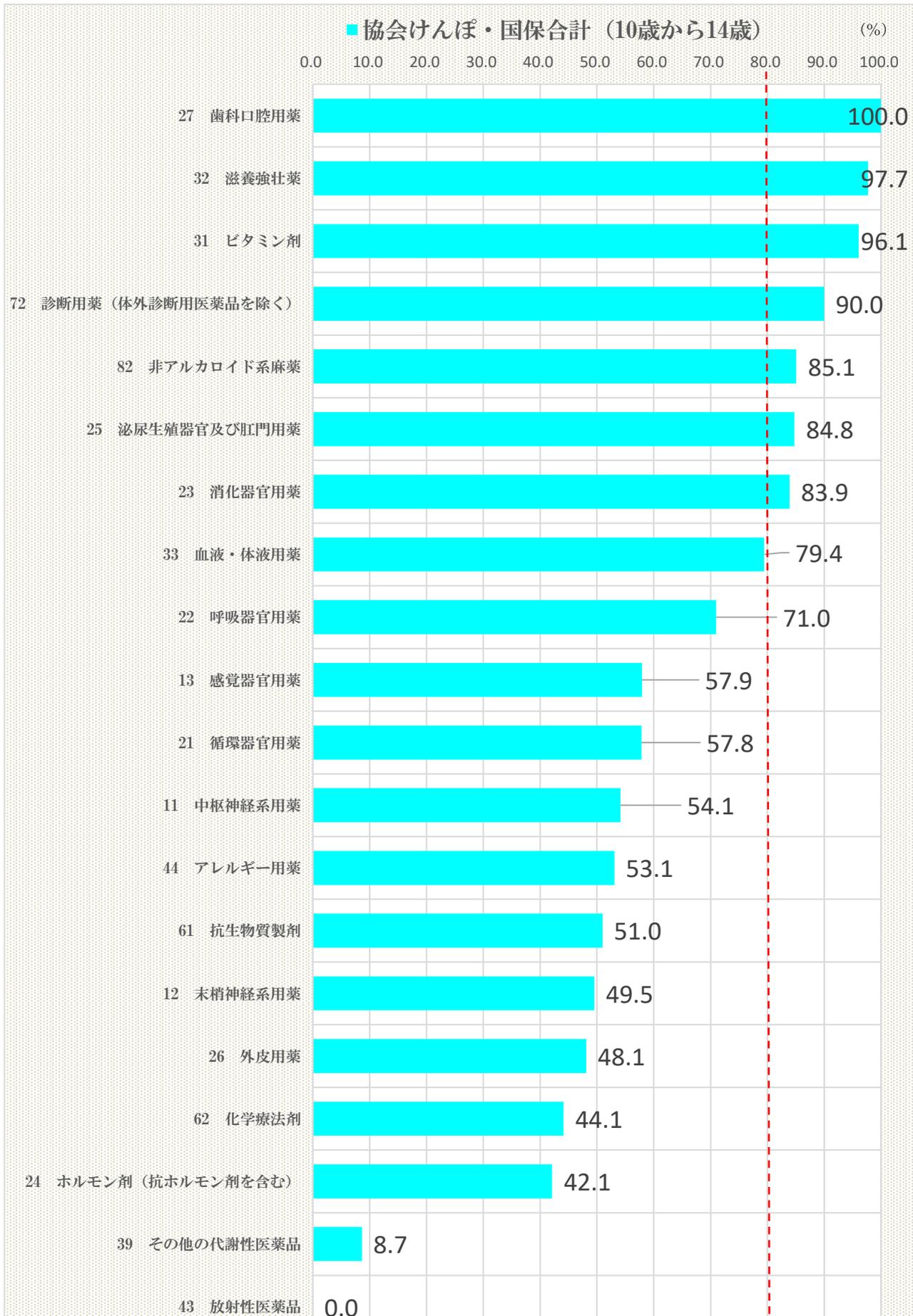
若年層における薬効分類別の使用割合

資料No.3-1



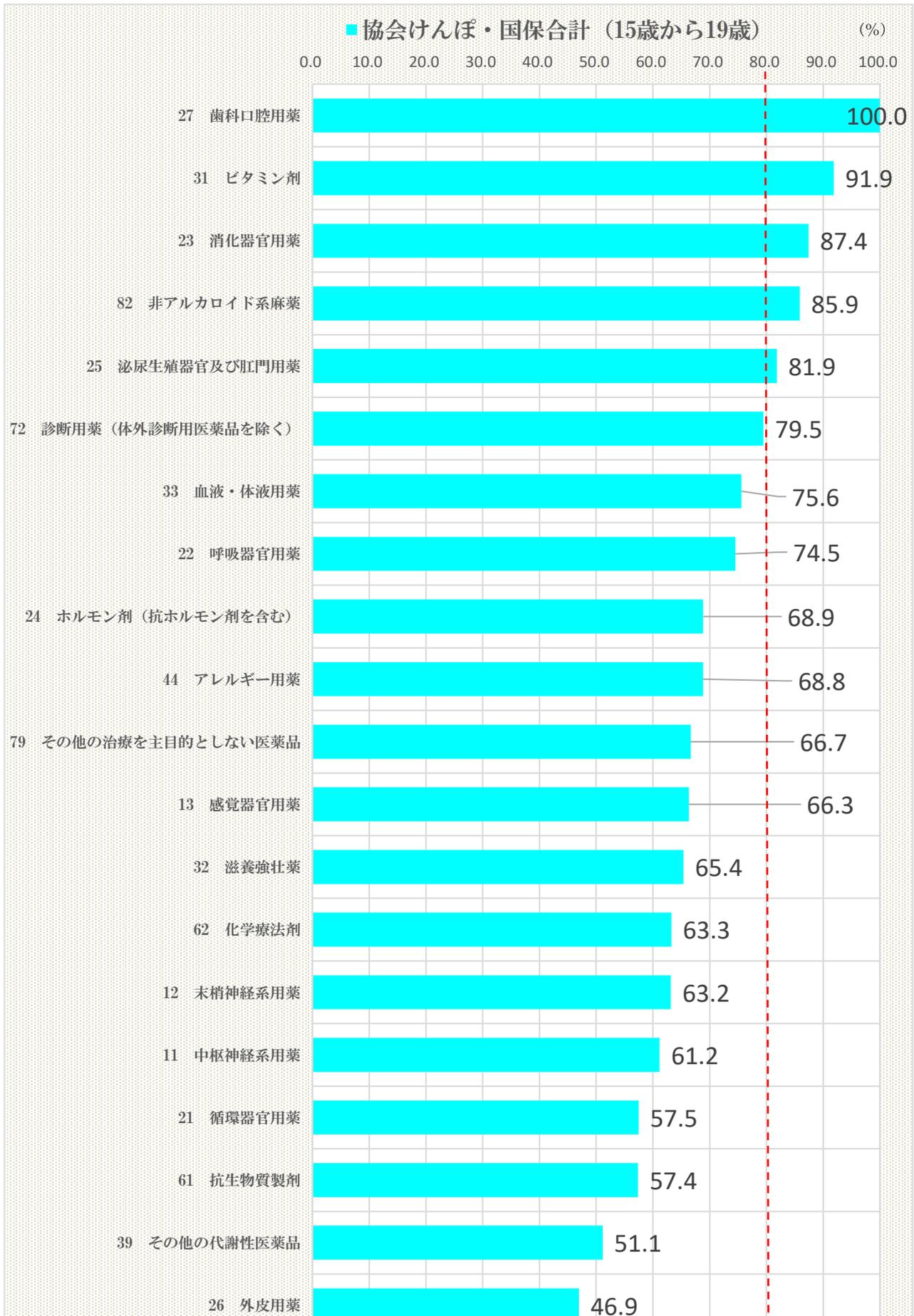
若年層における薬効分類別の使用割合

資料No.3-1



若年層における薬効分類別の使用割合

資料No.3-1



若年層における薬効分類別の使用割合

資料No.3-2

薬効分類別	協会けんぽ・国保合計(0歳から4歳)		
	使用割合(%)	対象薬剤数	切替薬剤数
32 滋養強壮薬	100.0	2,793	2,793
31 ビタミン剤	94.8	49	46
72 診断用薬(体外診断用医薬品を除く)	92.3	26	24
23 消化器官用薬	87.1	11,552	10,064
11 中枢神経系用薬	85.3	16,160	13,779
33 血液・体液用薬	82.2	108,122	88,845
22 呼吸器官用薬	68.0	288,805	196,470
12 末梢神経系用薬	63.4	169	107
21 循環器官用薬	58.5	726	425
39 その他の代謝性医薬品	57.4	16,552	9,493
13 感覚器官用薬	57.2	2,844	1,627
61 抗生物質製剤	54.6	24,643	13,451
62 化学療法剤	49.2	1,855	912
44 アレルギー用薬	48.9	70,860	34,631
26 外皮用薬	44.4	31,079	13,812
25 泌尿生殖器官及び肛門用薬	41.9	148	62
24 ホルモン剤(抗ホルモン剤を含む)	36.7	702	258
82 非アルカロイド系麻薬	12.7	78	10

若年層における薬効分類別の使用割合

資料No.3-2

薬効分類別	協会けんぽ・国保合計(5歳から9歳)		
	使用割合(%)	対象薬剤数	切替薬剤数
27 歯科口腔用薬	100.0	4	4
72 診断用薬(体外診断用医薬品を除く)	100.0	47	47
31 ビタミン剤	99.8	609	608
25 泌尿生殖器官及び肛門用薬	94.4	532	502
23 消化器官用薬	89.7	17,089	15,321
32 滋養強壯薬	85.5	924	790
33 血液・体液用薬	73.6	71,888	52,928
11 中枢神経系用薬	70.9	22,551	15,994
22 呼吸器官用薬	64.3	144,312	92,790
12 末梢神経系用薬	63.3	309	196
13 感覚器官用薬	56.5	3,105	1,753
61 抗生物質製剤	52.0	34,343	17,873
44 アレルギー用薬	48.9	115,257	56,357
26 外皮用薬	43.7	30,704	13,414
21 循環器官用薬	36.5	1,037	378
62 化学療法剤	35.9	1,761	633
39 その他の代謝性医薬品	28.0	6,495	1,818
82 非アルカロイド系麻薬	20.0	45	9
24 ホルモン剤(抗ホルモン剤を含む)	17.7	370	65

若年層における薬効分類別の使用割合

資料No.3-2

薬効分類別	協会けんぽ・国保合計(10歳から14歳)		
	使用割合(%)	対象薬剤数	切替薬剤数
27 歯科口腔用薬	100.0	2	2
32 滋養強壯薬	97.7	1,407	1,375
31 ビタミン剤	96.1	4,202	4,037
72 診断用薬(体外診断用医薬品を除く)	90.0	30	27
82 非アルカロイド系麻薬	85.1	47	40
25 泌尿生殖器官及び肛門用薬	84.8	525	445
23 消化器官用薬	83.9	31,349	26,305
33 血液・体液用薬	79.4	47,244	37,534
22 呼吸器官用薬	71.0	76,556	54,355
13 感覚器官用薬	57.9	3,088	1,789
21 循環器官用薬	57.8	5,755	3,329
11 中枢神経系用薬	54.1	57,161	30,943
44 アレルギー用薬	53.1	93,207	49,478
61 抗生物質製剤	51.0	29,083	14,827
12 末梢神経系用薬	49.5	1,282	635
26 外皮用薬	48.1	45,750	22,013
62 化学療法剤	44.1	1,778	784
24 ホルモン剤(抗ホルモン剤を含む)	42.1	776	327
39 その他の代謝性医薬品	8.7	6,068	525
43 放射性医薬品	0.0	111	0

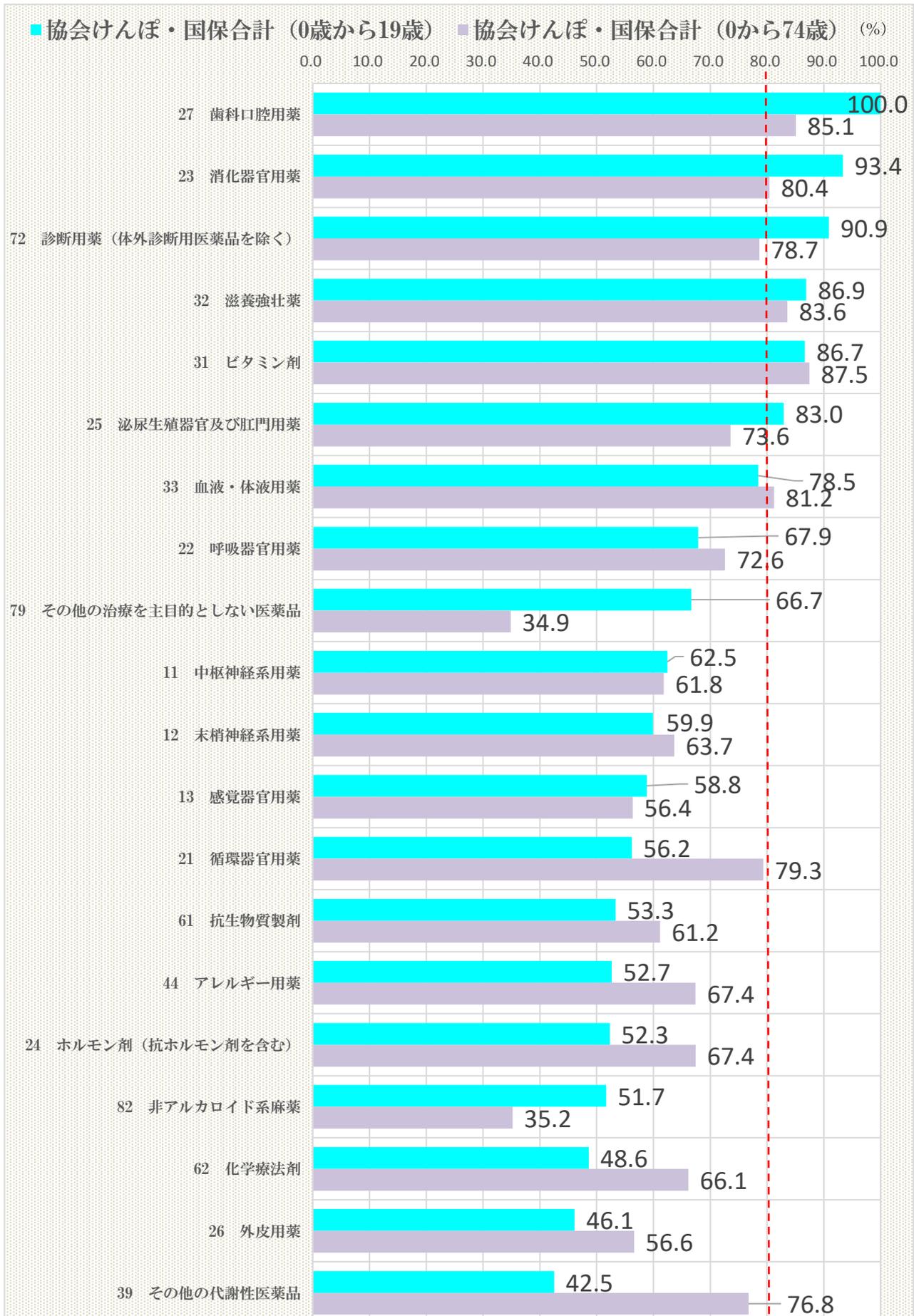
若年層における薬効分類別の使用割合

資料No.3-2

薬効分類別	協会けんぽ・国保合計(15歳から19歳)		
	使用割合(%)	対象薬剤数	切替薬剤数
27 歯科口腔用薬	100.0	9	9
31 ビタミン剤	91.9	10,222	9,393
23 消化器官用薬	87.4	38,293	33,482
82 非アルカロイド系麻薬	85.9	85	73
25 泌尿生殖器官及び肛門用薬	81.9	843	690
72 診断用薬(体外診断用医薬品を除く)	79.5	39	31
33 血液・体液用薬	75.6	35,781	27,049
22 呼吸器官用薬	74.5	36,582	27,263
24 ホルモン剤(抗ホルモン剤を含む)	68.9	1,915	1,319
44 アレルギー用薬	68.8	40,844	28,116
79 その他の治療を主目的としない医薬品	66.7	3	2
13 感覚器官用薬	66.3	1,981	1,314
32 滋養強壮薬	65.4	2,345	1,533
62 化学療法剤	63.3	1,993	1,261
12 末梢神経系用薬	63.2	3,618	2,285
11 中枢神経系用薬	61.2	64,332	39,365
21 循環器官用薬	57.5	6,988	4,018
61 抗生物質製剤	57.4	20,275	11,635
39 その他の代謝性医薬品	51.1	6,311	3,228
26 外皮用薬	46.9	43,842	20,582

若年層における薬効分類別の使用割合

資料No.3-3



若年層における薬効分類別の使用割合

資料No.3-4

薬効分類別	協会けんぽ・国保合計(0歳から19歳)			協会けんぽ・国保合計(0から74歳)		
	使用割合(%)	対象薬剤数	切替薬剤数	使用割合(%)	対象薬剤数	切替薬剤数
27 歯科口腔用薬	100.0	15	15	85.1	536	456
23 消化器官用薬	93.4	15,082	14,084	80.4	3,927,176	3,158,697
72 診断用薬(体外診断用医薬品を除く)	90.9	143	130	78.7	6,189	4,869
32 滋養強壯薬	86.9	7,469	6,491	83.6	131,288	109,753
31 ビタミン剤	86.7	98,283	85,171	87.5	679,799	594,635
25 泌尿生殖器官及び肛門用薬	83.0	2,048	1,699	73.6	267,573	196,872
33 血液・体液用薬	78.5	263,035	206,356	81.2	1,689,983	1,373,010
22 呼吸器官用薬	67.9	546,255	370,877	72.6	1,331,565	966,748
79 その他の治療を主目的としない医薬品	66.7	3	2	34.9	631	220
11 中枢神経系用薬	62.5	160,204	100,080	61.8	3,811,827	2,355,963
12 末梢神経系用薬	59.9	5,378	3,222	63.7	286,420	182,335
13 感覚器官用薬	58.8	11,017	6,482	56.4	272,799	153,723
21 循環器官用薬	56.2	14,507	8,151	79.3	6,003,655	4,763,216
61 抗生物質製剤	53.3	108,344	57,787	61.2	382,065	233,749
44 アレルギー用薬	52.7	320,168	168,582	67.4	1,028,142	692,997
24 ホルモン剤(抗ホルモン剤を含む)	52.3	3,763	1,969	67.4	130,049	87,675
82 非アルカロイド系麻薬	51.7	255	132	35.2	5,527	1,945
62 化学療法剤	48.6	7,387	3,591	66.1	125,255	82,853
26 外皮用薬	46.1	151,375	69,822	56.6	2,051,383	1,161,255
39 その他の代謝性医薬品	42.5	35,426	15,064	76.8	1,630,952	1,252,038

5. まとめ

《後発医薬品の使用促進について》

国では医療費適正化の一環としてジェネリック医薬品の使用割合を 80%以上にするための使用促進を行っています。

今般の統計結果から、本県では改めて若年層の使用割合が低いことが明らかになりました。

このことを踏まえ、保険者協議会としても県、医師会、歯科医師会、薬剤師会などの関係機関との連携した取り組みに加え、教育機関等の協力も得て、保護者の方々にジェネリック医薬品が安心・安全な薬剤であることや医療費の抑制につながることを周知していく必要があると考えます。